



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

学校教育におけるジェンダー平等戦略－教育環境と 教育内容に焦点をあてて－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-10-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 直井, 道子, 福富, 護, 村松, 泰子, 大竹, 美登利, 高橋, 道子, 中澤, 智恵, 松川, 誠一, 眞鍋, 倫子, 木村, 育恵, 苫米地, 伸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/90507

教師調査

1. 教師の基本属性

今回の質問紙調査に対して回答を得られたのは、小学校教師342名、中学校教師323名である。

以下、小・中学校教師それぞれに、回答者の基本属性として、性別、年齢、配偶者・パートナーの有無について示し、学校での位置として、研究している教科ないしは担当教科と、学校での役職経験について示す。

1.1. 性別（問14）

教師回答者の性別構成を見ると、小学校教師では、女性が3分の2を占め、中学校教師では、男性が6割近くを占めている。なお、性別が記入されていなかったのは、29名であった（図表 -1-1）。

【図表 -1-1】校種（男女別％）

(%)			
	人数	女性	男性
小学校	325	66.8	33.2
中学校	311	43.4	56.6

1.2. 年齢（問14）

小学校教師は、20歳代が少ないものの、40歳未満、40歳代、50歳以上と、ある程度均等に分布している。一方、中学校教師は、40歳代に4割強集中している。なお、年齢が記入されていなかったのは17名であった（図表 -1-2）。

【図表 -1-2】年齢（校種・男女別％）

		(%)					
		人数	20歳代	30歳代	40歳代	50歳以上	χ ²
小学校	女性	217	18.4	17.1	30.4	34.1	**
	男性	108	16.7	34.3	26.9	22.2	
	合計	325	17.8	22.8	29.2	30.2	
中学校	女性	135	9.6	20.7	42.2	27.4	n.s.
	男性	174	12.1	19.5	44.3	24.1	
	合計	309	11.0	20.1	43.4	25.6	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

これを性別にみると、小学校では、男性は30歳代に、女性は50歳以上に多く、年齢構成が性によってかなり異なっている。中学校では、このような性別による年齢構成の違いはそれほど大きくない。なお、性別・年齢のいずれかあるいは両方が記入されていないケー

スは、31であった。

1.3. 配偶者・パートナー（問15）

配偶者・パートナーの有無については、小学校・中学校教師とも、配偶者・パートナーのいる者が7割程度である（図表 -1-3）。年齢を反映して、中学校教師の方がやや有配偶率が高い。男女を比べてみると、女性の無配偶者率が男性よりも高い。

一方、配偶者・パートナーの職業をみると（図表 -1-4）、常勤の勤め人が小学校教師では4分の3、中学校教師では3分の2弱と、小学校教師の配偶者の常勤率が1割ほど高かった。無職を除いた有職率をみても、小学校教師の方が少し高い。男性をとりあげて、配偶者の有職率をみると小・中学校とも7割程度であるが、常勤である比率は小学校教師の方が少し高い。

【図表 -1-3】配偶者・パートナー（校種・男女別％）

（％）

		人数	いる	いない	χ^2
小学校	女性	215	67.0	33.0	n.s.
	男性	107	75.7	24.3	
	合計	322	69.9	30.1	
中学校	女性	134	69.4	30.6	*
	男性	175	80.0	20.0	
	合計	309	75.4	24.6	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

【図表 -1-4】配偶者・パートナーの職業（校種・男女別％）

（％）

		人数	常勤の勤め人	非常勤	自営業	自由業	その他の職業	無職	χ^2
小学校	女性	144	86.8	1.4	4.2	2.1	4.2	1.4	***
	男性	81	53.1	12.3	1.2	0.0	1.2	32.1	
	合計	225	74.7	5.3	3.1	1.3	3.1	12.4	
中学校	女性	93	89.2	3.2	3.2	2.2	2.2	0.0	***
	男性	137	46.7	18.2	0.0	2.2	2.9	29.9	
	合計	230	63.9	12.2	1.3	2.2	2.6	17.8	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

1.4. 研究している教科／担当教科（問16）

小学校教師には主に研究している教科を、中学校教師には主たる担当教科を回答してもらった。なお、データ入力・分析に際して、複数の教科が記入されている場合には、最初に既述された教科を採用した。

小学校教師の研究している教科は、「国語（28.3％）」と「数学（22.3％）」に偏って

おり、その他に「体育」「道徳」が1割弱であった。一方、中学校教師では、数学・国語・英語・理科・社会といういわゆる「主要5教科」と「体育」に、それぞれ十数%程度ずつ分布しており、多様であった。中学校では、授業で担当する教科がはっきりと分かれているためであろう。ただし、音楽、図工（美術）、家庭科、特別支援活動を担当しているという回答は少なかった。また、道徳や特別活動などへの回答はなかった（図表 -1-5）。

研究している教科を性別にみると、小学校教師では、男性は体育（17.0%＞女性6.2%）、女性は国語（31.6%＞男性21.6%）が多い。そのほか、理科や社会は男性のほうが、道徳は女性のほうが多い。

中学校教師では、男性では数学、理科、社会が、女性では国語、英語、音楽が多い。このことは、教科を担当している教師の性別比（図表 -1-6）を見ても同じことが指摘できる。このように、性別によって、研究している教科や担当教科に偏りのあることがわかる。

【図表 -1-5】研究している / 担当している教科（校種・男女別%）

(%)

教科	小学校			中学校		
	女性	男性	合計	女性	男性	合計
(人数)	177	88	265	123	168	291
算数 / 数学	23.7	19.3	22.3	9.8	17.3	14.1
国語	31.6	21.6	28.3	18.7	11.3	14.4
英語 / 外国語	0.6	0.0	0.4	17.9	10.1	13.4
理科	3.4	10.2	5.7	9.8	17.3	14.1
社会	1.1	9.1	3.8	7.3	15.5	12.0
音楽	6.8	3.4	5.7	8.9	1.2	4.5
図画工作 / 美術	4.5	4.5	4.5	4.9	4.2	4.5
家庭 / 技術・家庭	2.3	0.0	1.5	8.9	5.4	6.9
体育 / 保健体育	6.2	17.0	9.8	11.4	14.9	13.4
特別支援教育	2.3	0.0	1.5	2.4	2.4	2.4
生活	1.7	4.5	2.6	-	-	-
総合的な学習	2.3	1.1	1.9	-	-	-
道徳	10.2	5.7	8.7	-	-	-
特別活動	1.7	2.3	1.9	-	-	-
通級指導	-	-	-	0.0	0.6	0.3
図書	1.1	0.0	0.8	-	-	-
情報	0.6	1.1	0.8	-	-	-

【図表 -1-6】研究／担当している教科ごとの教員の性別比

(%)

	小学校			中学校		
	人数	女性	男性	人数	女性	男性
算数／数学	42	71.2	28.8	41	29.3	70.7
国語	56	74.7	25.3	42	54.8	45.2
英語／外国語	1	100.0	0.0	39	56.4	43.6
理科	15	40.0	60.0	41	29.3	70.7
社会	10	20.0	80.0	35	25.7	74.3
音楽	15	80.0	20.0	13	84.6	15.4
図画工作／美術	12	66.7	33.3	13	46.2	53.8
家庭／技術／家庭	4	100.0	0.0	20	55.0	45.0
体育／保健体育	26	42.3	57.7	39	35.9	64.1
特別支援教育	4	100.0	0.0	7	42.9	57.1
生活	7	42.9	57.1	-	-	-
総合的な学習	5	80.0	20.0	-	-	-
道徳	23	78.3	21.7	-	-	-
特別活動	5	60.0	40.0	-	-	-
合計	265	66.8	33.2	291	42.3	57.7

1.5. 役職経験（問17）

小・中学校教師の役職経験について尋ねたところ、小学校教師では、学年主任を経験したことがある者が半数に達していた（図表 -1-7）。

中学校教師では、学年主任と進路指導主任の経験者がほぼ同率で、3分の1強ずつであった。また、中学校では、研究主任やその他の役職経験があるとの回答が4分の1あった。その他の内容としては、教科主任や主幹という回答が見られた。こうしたことによって、無回答（非該当含む）は小学校の方が中学校の教師よりもやや多い。

これを性別にみると、小学校では、男女ともに学年主任を同程度経験しているものの、保健主任を除いて男性の役職経験率が女性より10ポイント以上高い。中学校では、保健主任以外、小学校でほぼ同程度経験率のあった学年主任も含めて、女性の役職経験率が低くなっている。保健主任については、女性の担当する役職という色合いが強いようである。また、小・中学校ともに、無回答は女性に多い。この無回答の多くは、役職経験のない者であると考えられる。以上の結果から、校務分掌が性別によって異なり、男性がリーダーとなっていることが浮き彫りとなった。

【図表 -1-7】男女別 役職経験（複数回答）

(%)

	小学校			中学校		
	女性	男性	合計	女性	男性	合計
人数	217	108	325	135	176	311
教務主任	9.7	25.9	14.9	3.7	17.6	11.8
研究主任	24.4	37.0	27.8	20.0	30.1	25.4
学年主任	50.2	54.6	50.6	20.7	48.3	36.8
進路指導主任	-	-	-	24.4	47.2	36.8
生活指導主任	20.7	36.1	25.1	1.5	32.4	18.9
保健主任	27.6	1.9	19.0	17.8	6.3	11.5
その他	12.0	13.9	12.0	23.0	26.7	25.7
無回答	35.9	25.9	33.3	37.0	20.5	27.6

注) 数値は、回答者の人数を100%とした場合の回答の比率

2. 学校と雰囲気

2.1. 現在勤めている学校について

2.1.1. 学校をとりまく全体像（問1）

「あなたの学校は、どのような学校だと思いますか」という設問について、子どもの様子、学校の様子、家庭・地域との関わりに関する以下の項目に対して、現任校についての教師の認識を「とてもそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4件法で尋ねた。

子どもの様子

1. 子どもがいきいきしている 2. 真面目な子どもが多い 3. 子どもに問題行動が多い
4. 学力の高い子どもが多い

学校の様子

5. 授業研究に力を入れている 6. 生活指導に力を入れている 7. 学校行事に力を入れている

家庭・地域との関わり

8. 教育熱心な親が多い 9. 地域と連携した行事や活動がさかんである
10. 家庭との連絡がよくとれている

全体的に、小・中学校ともに「3. 子どもに問題行動が多い」「4. 学力の高い子どもが多い」については「あまりそう思わない」割合が高く、それ以外の項目については「少しそう思う」と回答している割合が高い。ただし、「8. 教育熱心な親が多い」「9. 地域と連携した行事や活動がさかんである」については、「少しそう思う」と「あまりそう思わない」の差がそれほど大きくなかった。さらに詳しく分析するために、以下では、男女別クロス集計と校種別クロス集計の結果をみていく。

まず、男女別のクロス集計で検討したところ、図表 -2-1 に示すように、「3. 子どもに問題行動が多い」の項目で5%水準の有意差がみられた。他の質問項目では「少しそう思う」が最も多い回答を示す傾向があったが、この項目については男女ともに「あまりそう思わない」と最も多く回答し、その割合は男性 56.2%、女性 52.0%となっていた。

一方、子どもに問題行動が多いと「思う」回答をみると、男性よりも女性教師でその割合が高く、「とてもそう思う」と「少しそう思う」を合わせた場合、男性 34.9%に対し、女性は 42.7%におよぶ結果となっている。

【図表 -2-1】学校をとりまく全体像（男女別％）

(%

		人数	とてもそう思う	少しそう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない	χ ²
(1) 子どもが いきいきしている	女性	345	26.7	63.2	10.1	0.0	-
	男性	281	26.3	61.2	12.5	0.0	
	合計	626	26.5	62.3	11.2	0.0	
(2) 真面目な子ども が多い	女性	346	27.7	56.9	15.0	0.3	-
	男性	279	28.0	58.1	14.0	0.0	
	合計	625	27.8	57.4	14.6	0.2	
(3) 子どもに 問題行動が多い	女性	346	6.6	36.1	52.0	5.2	*
	男性	281	3.2	31.7	56.2	8.9	
	合計	627	5.1	34.1	53.9	6.9	
(4) 学力の高い 子どもが多い	女性	345	10.7	33.0	52.2	4.1	n.s.
	男性	280	12.1	33.9	51.8	2.1	
	合計	625	11.4	33.4	52.0	3.2	
(5) 授業研究に 力を入れている	女性	346	19.1	52.0	26.9	2.0	n.s.
	男性	282	19.1	48.6	30.1	2.1	
	合計	628	19.1	50.5	28.3	2.1	
(6) 生活指導に 力を入れている	女性	346	13.9	56.9	28.9	0.3	n.s.
	男性	281	19.6	53.7	25.6	1.1	
	合計	627	16.4	55.5	27.4	0.6	
(7) 学校行事に 力を入れている	女性	346	19.7	52.9	26.9	0.6	n.s.
	男性	280	23.9	56.1	19.6	0.4	
	合計	626	21.6	54.3	23.6	0.5	
(8) 教育熱心な親が 多い	女性	346	18.5	43.1	37.0	1.4	n.s.
	男性	280	17.5	42.5	38.2	1.8	
	合計	626	18.1	42.8	37.5	1.6	
(9) 地域と連携した 行事や活動が さかんである	女性	342	11.7	45.3	41.2	1.8	n.s.
	男性	280	10.0	48.9	37.5	3.6	
	合計	622	10.9	46.9	39.5	2.6	
(10) 家庭との連絡が よくとれている	女性	349	12.0	66.5	21.2	0.3	n.s.
	男性	280	9.3	65.0	24.3	1.4	
	合計	629	10.8	65.8	22.6	0.8	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

次に、図表 -2-2 に示される校種別のクロス集計結果を、上記の ～ に沿ってみていく。「子どもの様子」では、「１．子どもがいきいきしている」ことについて、小・中学校ともに「少しそう思う」と肯定的である割合が最も高い。「２．真面目な子どもが多い」についても同様だが、「とてもそう思う」と強く肯定する場合をみると小学校より中学校の方に多く、小学校 22.2％，中学校 33.2％というように校種間で 10 ポイントの差がみられた。

「３．子どもに問題行動が多い」については小・中学校ともに「あまりそう思わない」割合が最も高く半数を超えていたが、「そう思う」のように肯定する割合については小学校でやや高く、「全くそう思わない」という強い否定の回答については中学校の方が高い傾向があった（***p<.001）。「４．学力の高い子どもが多い」については、小・中学校ともに「あ

まりそう思わない」というように、やや否定的な回答が最も多く 5 割を超えていた。一方、「とても / 少しそう思う」といった肯定の回答傾向をみると校種で違いがみられ、「とてもそう思う」といった強い肯定の回答は中学校で高く（小学校 6.9%，中学校 15.6%）、「少しそう思う」割合は小学校で高かった（小学校 37.0%，中学校 29.1%）。

【図表 -2-2】学校をとりまく全体像（校種別％）

		人数	とてもそう思う	少しそう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない	χ ²
(1) 子どもが いきいきしている	小学校	334	24.9	65.3	9.9	0.0	-
	中学校	319	28.5	59.6	11.9	0.0	
	合計	653	26.6	62.5	10.9	0.0	
(2) 真面目な子ども が多い	小学校	334	22.2	61.7	15.9	0.3	-
	中学校	319	33.2	53.9	12.9	0.0	
	合計	653	27.6	57.9	14.4	0.2	
(3) 子どもに 問題行動が多い	小学校	335	7.5	37.0	52.8	2.7	***
	中学校	319	3.1	30.4	55.5	11.0	
	合計	654	5.4	33.8	54.1	6.7	
(4) 学力の高い 子どもが多い	小学校	332	6.9	37.0	54.2	1.8	***
	中学校	320	15.6	29.1	50.6	4.7	
	合計	652	11.2	33.1	52.5	3.2	
(5) 授業研究に 力を入れている	小学校	336	20.2	52.7	25.3	1.8	n.s.
	中学校	319	17.9	48.0	32.0	2.2	
	合計	655	19.1	50.4	28.5	2.0	
(6) 生活指導に 力を入れている	小学校	334	12.6	56.9	30.5	0.0	-
	中学校	320	20.3	54.7	23.8	1.3	
	合計	654	16.4	55.8	27.2	0.6	
(7) 学校行事に 力を入れている	小学校	336	17.3	53.0	29.2	0.6	***
	中学校	318	27.4	55.3	17.0	0.3	
	合計	654	22.2	54.1	23.2	0.5	
(8) 教育熱心な親が 多い	小学校	336	12.2	49.1	37.8	0.9	***
	中学校	318	23.6	36.5	37.7	2.2	
	合計	654	17.7	43.0	37.8	1.5	
(9) 地域と連携した 行事や活動が さかんである	小学校	331	14.2	47.7	37.5	0.6	**
	中学校	318	7.9	45.9	41.8	4.4	
	合計	649	11.1	46.8	39.6	2.5	
(10) 家庭との連絡が よくとれている	小学校	334	10.8	67.4	21.0	0.9	n.s.
	中学校	321	10.9	63.9	24.6	0.6	
	合計	655	10.8	65.6	22.7	0.8	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

「学校の様子」については、全体的に「6．生活指導に力を入れている」ことに対して「少しそう思う」とする割合が 5 割を超えている。0.1%水準の有意差がみられた「7．学校行事に力を入れている」もまた、「少しそう思う」と回答する割合が最も高く 5 割を超えていた。校種で明らかな差がみられたのは、この 2 つの項目に対して「とてもそう思う」

と強く肯定する割合がともに中学校で高く、「あまりそう思わない」と否定的な回答については小学校でより高かった点である。このように、「学校の様子」については、小学校よりも中学校教師の方が、生徒指導と学校行事に対して力を注いでいると強く認識していることが分かる。

「家庭・地域との関わり」については、「８．教育熱心な親が多い」「９．地域と連携した行事や活動がさかんである」の２つにそれぞれ 0.1%水準, 1%水準の有意差がみられた。例えば、「８．教育熱心な親が多い」に関して中学校教師が最も多く回答したのは「とてもそう思う」の 49.1%であった（小学校 36.5%）が、小学校で最も高い割合を示したのは「あまりそう思わない」の 37.8%（中学校 37.7%）であった。「９．地域と連携した行事や活動」については、小・中学校ともに「少しそう思う」が最も高い割合を示していたものの、先述の「８．教育熱心な親が多い」とは対照的に「とてもそう思う」割合が小学校で高く 14.2%（中学校 7.9%）、「あまりそう思わない」のは中学校で高く、41.8%（小学校 37.5%）であった。

このように、親の教育熱心さについては、中学校教師の方が「そう思う」と認識しており、地域連携の行事や活動については小学校教師の方が「さかんである」と考えていることが明らかになった。

以上から、「子どもの様子」については、「３．子どもの問題行動」に対する教師の認識で男女別、校種別で有意な差がみられ、子どもの問題行動の多さを指摘するのは女性教師に多いという傾向が明らかになった。

この「３．子どもの問題行動」について、男女別の統制をかけて女性教師間の回答傾向を詳しくみたところ（図表 -2-3）「３．子どもの問題行動が多い」と思うのは中学校女性教師よりも小学校女性教師で有意に高かった。すなわち、子どもの問題行動が多いという認識は、教師全体の中でも小学校女性教師でより高い傾向があるといえる。

【図表 -2-3】「子どもに問題行動が多い」（校種別・男女別％）

子どもに問題行動が多い		人数	とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	χ^2
女性	小学校	213	8.9	38.5	50.7	1.9	**
	中学校	133	3.0	32.3	54.1	10.5	
	合計	346	6.6	36.1	52.0	5.2	
男性	小学校	107	3.7	34.6	57.0	4.7	n.s.
	中学校	174	2.9	29.9	55.7	11.5	
	合計	281	3.2	31.7	56.2	8.9	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

次に、「学校の様子」の多くの項目については、教師の所属する校種によって認識に差が生じていることが明らかになった。例えば、「５．授業研究に力を入れている」と「思

う」ケースは小学校のうちでも男性教師で高かった。一方、中学校男性教師の場合は、「あまりそう思わない」に 36.0%の回答が集まっているように、どの教師よりも授業研究についての自己認識が低めである。ところが、「7. 学校行事に力を入れている」になると、中学校男性教師で「そう思う」と認識する割合が特に高くなっていた。すなわち、授業研究に力を入れていると考えているのは小学校で特に男性教師に多く、学校行事に力を入れていると考えているのは中学校で特に男性教師に多い傾向がある。

「家庭・地域との関わり」においても、教師の所属する校種によって認識に差が生じていた。例えば、「8. 教育熱心な親が多い」については、多くの教師が「少しそう思う」を最も多く選ぶ中で、「とてもそう思う」と強く肯定する割合が小学校よりも中学校で約 2 倍も高かった。ただし、中学校男性教師については「あまりそう思わない」と回答した割合が (40.2%) 最も高いという個別の特徴がみられた。

「9. 地域と連携した行事や活動がさかんである」については「少しそう思う」「あまりそう思わない」がともに 4 割台と回答が集中する一方で、「とてもそう思う」と強く肯定するケースは小学校で高かった。

最後に、10 項目に対する回答の調査 4 地域の傾向をみると、「家族との連絡がよくとれている」以外の 9 項目については、いずれも 0.1%水準で有意差がみられた。特に、「学力の高い子どもが多い」「教育熱心な親が多い」について「とてもそう思う」と回答した割合は国分寺で高く、他の地域の回答が 10%未満であるのに対し、国分寺はそれぞれ 36.3%、48.8%となっていた。

2.1.2. 現在勤めている学校の雰囲気について (問 2)

問 2 では、「あなたの学校はどのような雰囲気ですか」という設問について、以下の 9 項目に対して「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の 4 件法で教師の認識を尋ねた。

1. 職員会議などで活発な議論が交わされている
2. 教員間の意思疎通がうまくとれている
3. 周囲と違う意見を言いにくい雰囲気がある
4. 管理職からの強い指導がある
5. 自発的に行動するよりも指示を待って行動する雰囲気がある
6. 新しいことを始めにくい雰囲気がある
7. 職場では男性の意見が通りやすい
8. 男性教員の方が女性教員より保護者からの評判がよい
9. 男性教員の方が女性教員よりも管理職から信頼されている

全体的に、「１．職員会議などで活発な議論が交わされている」かについては「少しそう思う」と「あまりそう思わない」に回答が集まっていたが、小学校男性教師の場合、「とてもそう思う」と「全くそう思わない」の両極にも 12～14%の回答がみられた。中学校教師をみると、中学校女性教師は両極のうちの特に「全くそう思わない」の回答が多く(11.3%)有意差はみられないものの、同じ校種の男性教師とはやや異なる回答傾向を示していた。

「２．教員間の意思疎通がとれている」かについては、全体的に「少しそう思う」割合が最も高く、３から９のような学校や教師間の閉鎖性に関する項目に対しては、「あまりそう思わない」とする回答が多くを占めていた。

これらの項目について、男女別クロス集計の結果を示すのが図表 -2-4 である。

【図表 -2-4】現在勤めている学校の雰囲気について（男女別％）

		人数	とてもそう思う	少しそう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない	χ ²	
(1)	職員室などで 活発な議論が 交わされている	女性	348	5.7	37.6	47.1	9.5	n.s.
		男性	282	7.4	39.0	44.3	9.2	
(2)	教員間の 意思疎通が とれている	女性	347	11.0	53.9	33.4	1.7	n.s.
		男性	281	10.7	61.2	25.6	2.5	
(3)	周囲と違う意見が 言いにくい 雰囲気がある	女性	349	4.3	31.2	59.6	4.9	n.s.
		男性	282	5.0	25.2	61.0	8.9	
(4)	管理職からの 強い指導がある	女性	348	8.9	24.4	58.3	8.3	n.s.
		男性	282	6.7	20.9	63.5	8.9	
(5)	自発的に行動するよ りも指示を待って行動 する雰囲気がある	女性	349	4.3	30.4	61.3	4.0	n.s.
		男性	280	5.4	32.5	57.5	4.6	
(6)	新しいことを 始めにくい 雰囲気がある	女性	348	8.6	27.0	60.3	4.0	*
		男性	281	7.1	31.0	53.4	8.5	
(7)	職場では 男性の意見が 通りやすい	女性	346	0.9	7.5	63.6	28.0	-
		男性	278	0.0	6.5	65.1	28.4	
(8)	男性教員の方が 保護者からの 評判がよい	女性	339	1.8	10.0	67.6	20.6	n.s.
		男性	272	1.1	7.4	64.7	26.8	
(9)	男性教員の方が 管理職から 信頼されている	女性	341	2.9	13.2	64.5	19.4	n.s.
		男性	273	1.8	9.2	62.3	26.7	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

ここでは、「６．新しいことを始めにくい雰囲気がある」で5%水準の有意差がみられた。この項目では、男女ともに「あまりそう思わない」とする回答がもっとも多かったが、男

性 53.4% , 女性 60.3% というように、女性の方が若干その割合が高い。一方、次いで回答の多かった「少しそう思う」をみると、男性の回答が若干多くなっている。つまり、多くの教師は男女ともに新しいことを始めにくい雰囲気があるとはあまり思っていないが、「そう思う」ケースは男性教師の方が若干高めであるということがうかがえる。

次に、校種別に分析したところ（図表 -2-5） 質問項目 2 , 3 , 4 , 8 , 9 の 5 項目で校種による有意差がみられた。以下では、これら 5 項目についての詳細を順にみていこう。

【図表 -2-5】現在勤めている学校の雰囲気について（校種別％）

		人数	とてもそう思う	少しそう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない	χ ²	
(1)	職員室などで 活発な議論が 交わされている	小学校	337	8.3	38.3	43.3	10.1	n.s.
		中学校	320	4.4	38.1	49.4	8.1	
(2)	教員間の 意思疎通が とれている	小学校	337	11.9	49.6	36.2	2.4	***
		中学校	320	10.0	66.6	21.9	1.6	
(3)	周囲と違う意見が 言いにくい 雰囲気がある	小学校	339	6.5	34.5	54.9	4.1	***
		中学校	319	2.5	21.9	66.1	9.4	
(4)	管理職からの 強い指導がある	小学校	338	11.2	24.6	55.6	8.6	**
		中学校	319	3.8	21.3	66.1	8.8	
(5)	自発的に行動するよ りも指示を待って行 動する雰囲気がある	小学校	336	4.5	34.2	56.5	8.6	n.s.
		中学校	319	4.7	27.9	63.9	3.4	
(6)	新しいことを 始めにくい 雰囲気がある	小学校	336	9.2	28.0	58.6	4.2	n.s.
		中学校	319	6.3	29.8	56.1	7.8	
(7)	職場では 男性の意見が 通りやすい	小学校	330	0.6	5.5	62.1	31.8	n.s.
		中学校	320	0.6	8.4	66.3	24.7	
(8)	男性教員の方が 保護者からの 評判がよい	小学校	326	2.5	11.7	66.3	19.6	**
		中学校	312	0.6	6.1	66.0	27.2	
(9)	男性教員の方が 管理職から 信頼されている	小学校	328	3.7	13.7	63.7	18.9	*
		中学校	314	1.6	8.6	63.4	26.4	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

「 2 . 教員間の意思疎通がうまくとれている」については、全体的に「少しそう思う」とする割合が高いが、特に中学校での肯定の割合が高く、「とてもそう思う」「少しそう思う」をあわせると 76.6%（小学校では 61.5%）にのぼる。一方、「そう思わない」割合をみると、小学校で「あまりそう思わない」とする割合 36.2%と低くはない上に、中学校を 10 ポイント以上も上回っている。つまり、教師間の意思疎通については、中学校教師の方

が「うまくとれている」と認識している傾向がある。

「３．周囲と違う意見を言にくい雰囲気がある」をみると、全体的に「あまりそう思わない」割合が最も高いが、小学校５割台、中学校６割台というように１０ポイント以上の差がみられ、校種による認識の度合いの違いがうかがえる。なお、「そう思う」ケースについては小学校の方が、「そう思わない」ケースは中学校の方が高い。「４．管理職からの強い指導がある」もまた、全体的に「あまりそう思わない」割合が最も高いが、肯定的な回答は小学校、否定的な回答は中学校で高い傾向がある。すなわち、教師間のコミュニケーションや管理職との関係に対しては、小学校教師の方がその閉鎖性を認識し、中学校教師は教師間や管理職との関係を閉鎖的であると思わない傾向が強い。

「８．男性教員の方が女性教員より保護者からの評判がよい」と「９．男性教員の方が女性教員よりも管理職から信頼されている」についても、ともに「あまりそう思わない」が最も高く６割台を示しているも。しかしながら、「とてもそう思う」「少しそう思う」をあわせた肯定の回答は小学校の方が多く、中学校では「全くそう思わない」割合の方が高いという違いがみられた。また、「９．男性教員の方が女性教員より管理職から信頼されている」については、全体的に「あまりそう思わない」が最も多かったが、「全くそう思わない」件数をみると、小学校より中学校で多くなっている。

以上から、現在勤めている学校の雰囲気についての教師の認識として、次のような特徴を確認することができた。以下に、再度その特徴をまとめておく。

- ・多くの教師は、男女ともに新しいことを始めにくい雰囲気があるとはあまり思っていないが、「そう思う」ケースは男性教師の方が若干高めである
- ・教師間の意思疎通については、中学校教師の方が「うまくとれている」と認識している
- ・教師間のコミュニケーションや管理職との関係に対しては、小学校教師の方がその閉鎖性を認識し、中学校教師は教師間や管理職との関係を閉鎖的と思わない傾向が強い
- ・性別によって保護者や管理職からの評価や信頼が異なると思うケースは小学校教師に、相違がないと強く思うケースは中学校教師に多くみられる

なお、質問項目８、９のような保護者および管理職間のジェンダー・バイアスに関する項目に男女別の統制をかけてさらに分析したところ、図表 -2-6 に示すように「９．男性教員の方が管理職から信頼されている」で女性教師間に有意差がみられ、小学校の女性教師よりも中学校の女性教師の方が「全くそう思わない」と認識する割合が有意に高くなっていた（小学校 16.1%、中学校 24.6%）。

【図表 -2-6】「男性教員の方が管理職から信頼されている」(男女・校種別%)

男性教員の方が管理職から信頼されている		人数	とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	χ^2
女性	小学校	211	4.3	15.2	64.5	16.1	*
	中学校	130	0.8	10.0	64.6	24.6	
	合計	341	2.9	13.2	64.5	19.4	
男性	小学校	101	2.0	10.9	62.4	24.8	n.s.
	中学校	172	1.7	8.1	62.2	27.9	
	合計	273	1.8	9.2	62.3	26.7	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

2.2. 受け持ちのクラスについて (問3、問4)

2.2.1. 受け持ちのクラスについて感じる事 (問3)

学級担任をしている教師に「あなたのクラスについて、次のようなことをどのくらい強く感じますか。」という設問で、次の7項目について「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法で回答を求めた。

1. みんなが協力し合うクラスだ
2. 男女の仲が良いクラスだ
3. 子どもたちはよく授業を聞いてくれる
4. 子どもたちは男女に分かれて行動することが多い
5. 自分は子どもたちから信頼されている
6. 子どもたちは自分に期待している
7. 子どもたちは何でも話してくれる

以下に示す図表 -2-7 は男女別に、表 -2-8 は校種別にクロス集計した結果である。まずは、図表 -2-7 をもとに、男女別の結果をみていこう。

「1. みんなが協力し合うクラスだ」については、男女ともに「少しそう思う」と回答する割合が最も高かったが(男性 56.2%, 女性 62.7%), 「とてもそう思う」という強い肯定の回答をみると女性に、「あまりそう思わない」のようなやや否定的な回答については男性にその割合が高い。「2. 男女の仲が良いクラスだ」では 1%水準で有意差がみられ、5割の教師が「少しそう思う」と回答しているが、より強い肯定は女性教師で、やや否定的な回答は男性教師で多くなっている。「4. 子どもたちは男女に分かれて行動することが多い」については、「あまりそう思わない」とする回答が最も多いものの、その割合は女性の方が高く 48.7%となっている。男性の場合は、「あまりそう思わない」と「少しそう思う」の割合がそれぞれ 40.8%, 37.0%というように、両者にさほど差がみられない。

【図表 -2-7】受け持ちのクラスについて感じる事(男女別%)

		人数	とてもそう思う	少しそう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない	X ²
(1) みんなが協力し 合うクラスだ	女性	271	22.1	62.7	15.1	0	-
	男性	185	16.2	56.2	25.9	1.6	
(2) 男女の仲が良い クラスだ	女性	274	31.0	55.8	12.4	0.7	**
	男性	185	22.2	51.9	25.4	0.5	
(3) 子どもたちは よく授業を聞いて くれる	女性	272	29.4	57.0	13.6	0	-
	男性	185	27.0	57.8	13.5	1.5	
(4) 子どもたちは男女 に分かれて行動 することが多い	女性	273	9.2	33.7	48.7	8.4	n.s.
	男性	184	14.1	37.0	40.8	8.2	
(5) 自分は 子どもたちから 信頼されている	女性	270	11.1	78.5	10.0	0.4	*
	男性	182	7.1	72.5	18.7	1.6	
(6) 子どもたちは自分 に期待している	女性	270	17.8	64.1	17.8	0.4	n.s.
	男性	184	10.9	67.4	20.1	1.6	
(7) 子どもたちは何で も話してくれる	女性	271	11.4	67.9	20.3	0.4	***
	男性	184	5.4	56.0	37.0	1.6	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

「5. 自分は子どもたちから信頼されている」については5%水準で有意差がみられ、男女ともに7割以上が「少しそう思う」と回答しているが、より強い肯定は女性教師、やや否定的な回答は男性教師の方が若干高めである。「7. 子どもたちは何でも話してくれる」では0.1%水準で有意差がみられた。この項目では、男女ともに最も回答が多かったのは「少しそう思う」であるが、男性56.0%、女性67.9%というように、男女間で10ポイント以上の開きがある。この項目についても、上記の項目と同様に、より強い肯定を示す回答は女性教師、やや否定的な回答については男性教師の方が多くなっていた。

このように、男女別でみた場合、クラス集団のまとまりや仲の良さや教師自身に関する信頼度をたずねる項目については、「少しそう思う」と肯定的に回答する割合が高いが、全回答のうち、より強い肯定を示す回答については女性教師で多く、「あまりそう思わない」といったやや否定的な回答については男性教師で多いという特徴が共通してみられた。

次に、図表 -2-8 に示した校種別のクロス集計結果をみていこう。

校種別では、「3. 子どもたちはよく授業を聞いてくれる」を除く全てに有意差がみられた。「1. みんなが協力し合うクラスだ」と「2. 男女の仲が良いクラスだ」については、全体的に「少しそう思う」が最も高い割合を示したが、「とてもそう思う」という強い肯定では小学校が、「あまりそう思わない」については中学校の方が高い割合を示していた。

「4. 子どもたちは男女に分かれて行動することが多い」をみると、小学校では「あまりそう思わない」が51.1%と最も高く、中学校では「少しそう思う」が38.8%で最も高く、

同じ肯定的回答でもその認識の強さに違いがみられる。

【図表 -2-8】受け持ちのクラスについて感じる事(校種別%)

		人数	とてもそう思う	少しそう思う	あまり そう思わない	全く そう思わない	χ^2
(1) みんなが協力し合 うクラスだ	小学校	282	24.5	59.2	16.3	0.0	-
	中学校	192	13.5	59.9	25.0	1.6	
(2) 男女の仲が良い クラスだ	小学校	285	32.3	56.8	10.5	0.4	***
	中学校	191	19.4	52.4	27.2	1.0	
(3) 子どもたちは よく授業を聞いて くれる	小学校	284	25.7	59.9	14.1	0.4	n.s.
	中学校	190	32.1	54.2	12.6	1.1	
(4) 子どもたちは男女 に分かれて行動 することが多い	小学校	285	7.0	30.9	51.2	10.9	***
	中学校	188	18.1	38.8	38.3	4.8	
(5) 自分は 子どもたちから 信頼されている	小学校	280	12.5	76.8	10.0	0.7	**
	中学校	187	4.8	74.3	19.8	1.1	
(6) 子どもたちは自分 に期待している	小学校	282	20.2	66.0	13.1	0.7	***
	中学校	187	7.0	64.7	27.3	1.1	
(7) 子どもたちは何で も話してくれる	小学校	283	12.7	69.3	17.3	0.7	***
	中学校	187	4.3	53.5	41.2	1.1	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

「5.自分は子どもたちから信頼されている」、「6.子どもたちは自分に期待している」、「7.子どもたちは何でも話してくれる」の3項目については、全体的に「少しそう思う」のようにやや肯定的な回答が最も多かったが、「とてもそう思う」というより強い肯定については3項目全てにおいて小学校で高い。一方、「あまりそう思わない」という比較的否定的な回答については、3項目全てにおいて中学校の割合が高い。特に、「7.子どもたちは何でも話してくれる」に対して「あまりそう思わない」と回答する割合は校種で大きな差異がみられ、小学校 17.3%であるのに対し、中学校 41.2%というように 23.9 ポイントもの開きがあった。

このように、校種別にみた場合、クラス集団のまとまりや仲の良さや教師自身に関する信頼度をきく項目については、「少しそう思う」と肯定的に回答する割合が高いものの、全回答のうち、より強い肯定を示す回答については小学校で多く、「あまりそう思わない」といったやや否定的な回答については中学校で多いという特徴が共通してみられた。

以上から、クラス集団のまとまりや仲の良さ、子どもたちからの教師自身への信頼の自己認識については、男性よりも女性教師、中学校教師よりも小学校教師でより肯定的な評価がみられ、やや否定的な評価については男性で中学校教師の方が多い傾向が明らかに

なった。

2.2.2. クラスの学級運営について（問4）

学級担任をしている教師を対象に、クラスの学級運営について、「1．とてもうまくいっている」「2．ややうまくいっている」「3．どちらでもない」「4．あまりうまくいっていない」「5．全くうまくいっていない」の5件法で回答を求めた。この結果を男女別クロスで分析したところ、男女で有意差はみられなかった。

次に、校種別で分析したところ、図表 -2-9 に示すように、校種で5%水準の有意差がみられることがわかる。全体的に「ややうまくいっている」が最も高い割合を示しているが、「とてもうまくいっている」「ややうまくいっている」ともに小学校の割合の方が高くなっていた。

【図表 -2-9】「クラスの学級運営について」（校種・男女別%）

クラスの学級運営 (問4)		人数	とてもうまく いっている	ややうまく いっている	どちらでも ない	あまりうまく いっていない	全くうまく いっていない	χ ²
小学校		280	10.7	63.2	20.4	5.0	0.7	*
中学校		189	4.2	57.7	32.3	5.3	0.5	
小学校	女性	182	11.5	65.4	19.8	2.7	0.5	n.s.
	男性	86	9.3	57.0	22.1	10.5	1.2	
中学校	女性	87	6.9	51.7	34.5	6.9	0	-
	男性	95	2.1	63.2	29.5	4.2	1.1	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

なお、男女で校種による違いがみられるかどうか性別を統制変数にして検討したところ、男性教師間では校種による回答傾向に有意な差はなかったが、女性教師の場合、最も回答の多かった「ややうまくいっている」を比較してみると小学校女性教師 65.4%、中学校女性教師 51.7%というように小学校の割合が高い傾向がみられた。逆に、「3．どちらでもない」については、中学校女性教師の割合の方が高く、両者間に 14.7 ポイントの差がみられた。

以上のように、クラスの学級運営については、小学校で肯定的にとらえる割合が有意に高く、男女別にみると女性教師がより肯定的に学級運営の現状をとらえている傾向がみられる結果となった。

3．学級経営の方向性と生活指導におけるジェンダー・バイアス

3.1. 学級経営の方針（問5）

学級経営の方針についての意見を4つの質問で尋ねた。具体的には、(1) 個性を尊重するよりも、集団のまとまりを重視したい、(2) 授業中は、活発な活動をさせるため、多少騒がしくてもよい、(3) 学校では、生活指導より十分な学力を身につけさせることを重視すべきである、(4) 安全には気をつけるが、多少の冒険は試みたい、という質問文である。回答は、いずれの質問についても、「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4件法で求めた。

(1)は、個性重視／集団性重視の軸についての質問である。集団性を重視すべきという問いに対して「とてもそう思う」が8.2%、「少しそう思う」が64.0%で、7割以上の教師が、個性よりも集団性・協調性を重視していると答えている（図表 -3-1）。

小学校・中学校それぞれにおいて男女間で回答傾向に差があるかどうかを検定したところ、小学校・中学校どちらにおいても有意な差は見られなかった。しかし、校種間では1%水準で有意差が示された。男女間では差はないが、校種によって差があり、中学校教師の方が小学校教師よりも集団性を重視しているようである。

【図表 -3-1】個性を尊重するよりも、集団のまとまりを重視したい（校種別・男女別%）

問5(1)		合計	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	χ^2
小学校	男性	106	5.7%	61.3%	29.2%	3.8%	n.s.
	女性	208	2.9%	64.9%	30.3%	1.9%	
	合計	314	3.8%	63.7%	29.9%	2.5%	
中学校	男性	173	15.6%	63.6%	19.7%	1.2%	n.s.
	女性		10.8%	64.6%	24.6%	0.0%	
	合計	303	13.5%	64.0%	21.8%	0.7%	
合 計		617	8.6%	63.9%	25.9%	1.6%	
	小学校	329	3.6%	63.8%	30.1%	2.4%	***
	中学校	315	13.0%	64.1%	22.2%	.6%	

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$ n.s.: not significant

(2)は、授業中の活動性に対する意見を尋ねた。静粛さを犠牲にしても活発な方がよいと考える教師は、「とてもそう思う」が1.9%、「少しそう思う」が40.4%で、合計すると4割強である（図表 -3-2）。授業中の静粛さに重きを置く教師と、必ずしもそれを重視しない教師とに分かれている。

男女別に見ると、有意な差が示されなかった。さらに、校種別についても有意な差は示されなかった。

【図表 -3-2】授業中は活発な活動をさせるため、多少騒がしくてもよい（校種別・男女別％）

問5(2)		合計	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	χ^2
小学校	男性	106	3.8	43.4	45.3	7.5	n.s.
	女性	211	0.9	38.4	52.1	8.5	
	合計	317	1.9	40.1	49.8	8.2	
中学校	男性	174	2.3	39.7	48.3	9.8	n.s.
	女性	131	1.5	45.0	44.3	9.2	
	合計	305	2.0	42.0	46.6	9.5	
合計		622	1.9	41.0	48.2	8.8	
	小学校	332	1.8	40.1	50.0	8.1	n.s.
	中学校	316	1.9	40.8	48.1	9.2	

(3)は、生活指導重視／学力指導重視の軸についての質問である。学力を重視すべきかという問いに対して、「とてもそう思う」が 3.4%、「少しそう思う」が 23.3%と、学力を重視する教師は4分の1しかない（図表 -3-3）。

男女別、校種別にみると、いずれも有意差が示されなかった。

【図表 -3-3】学校では、生活指導よりも十分な学力を身につけさせることを重視すべきである（校種別・男女別％）

問5(3)		合計	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	χ^2
小学校	男性	106	2.8	30.2	58.5	8.5	n.s.
	女性	211	3.8	19.9	68.2	8.1	
	合計	317	3.5	23.3	65.0	8.2	
中学校	男性	174	3.4	21.8	62.6	12.1	n.s.
	女性	130	2.3	24.6	65.4	7.7	
	合計	304	3.0	23.0	63.8	10.2	
合計		621	3.2	23.2	64.4	9.2	
	小学校	332	3.6	23.2	65.1	8.1	n.s.
	中学校	315	3.2	23.5	63.5	9.8	

(4)では、安全に配慮するものの多少の冒険は試みたいという質問をしたところ、「とてもそう思う」が 6.0%、「少しそう思う」が 46.9%で、リスクを取ることに積極的な回答者と消極的な教師は、ほぼ半数ずつであった（図表 -3-4）。

男女別にみると、有意な差は示されなかった。他方、校種別に集計した値については、1%水準で有意な差が認められた。中学校教師の方が小学校教師よりもリスクを回避する傾向が強いようである。これを(1)の集団性重視の傾向と合わせて考えると、中学校では小学校よりも教師の児童・生徒に対する統制志向が強いことが示唆される。

【図表 -3-4】安全には気をつけるが、多少の冒険は試みたい（校種別・男女別％）

問5(4)		合計	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	χ^2
小学校	男性	106	12.3	49.1	32.1	6.6	n.s.
	女性	212	7.1	52.8	34.0	6.1	
	合計	318	8.8	51.6	33.3	6.3	
中学校	男性	173	4.6	43.9	43.9	7.5	n.s.
	女性	132	2.3	39.4	49.2	9.1	
	合計	305	3.6	42.0	46.2	8.2	
合計		623	6.3	46.9	39.6	7.2	
	小学校	333	8.4	52.0	33.6	6.0	***
	中学校	317	3.5	41.6	46.7	8.2	

3.2. 子どもによく注意すること（問6）

3.2.1. 注意することがらの数

問6では、10種類の生活習慣やしつけに関して、自分が児童・生徒に注意を行なうことがよくあるかどうかを、児童・生徒の男女別に質問した。具体的には、「忘れ物」「言葉遣い」「清潔・身だしなみ」「整理整頓」「家の手伝い」「食べ方・座り方などの行儀」「帰宅時間」「子どもたちが頑張らなかった時」「友だちと仲良くしなかった時」「泣いた時」の10項目である。また、「当てはまるものはない」という項目も別途設けた。

回答形式は、当てはまるもの全てに○をつける形になっている。ここでは、全回収数に対する○を付けた回答者の割合（回答率）を中心に分析を行なう（図表 -3-6）。

女子児童・生徒に対してよく注意することがらで、半数以上の教師が○を付けたものは、第1位「言葉遣い」(69.2%)、第2位「友達と仲良くしなかったとき」(66.5%)、第3位「忘れ物」(58.5%)、第4位「子ども達のがんばらなかったとき」(58.2%)であった。男子児童・生徒に対してよく注意することがらで半数以上の教師が○をつけたものは、第1位「忘れ物」(78.3%)、第2位「言葉遣い」(72.5%)、第3位「整理整頓」(68.4%)、第4位「友達と仲良くしなかったとき」(66.2%)、第5位「子ども達のがんばらなかったとき」(63.5%)、第6位「食べ方・座り方などの行儀」(58.2%)、第7位「清潔・身だしなみ」(58.2%)となっている。「友達と仲良くしなかったとき」という対人関係や「言葉遣い」「忘れ物」といった集団生活の中で必要とされる基本的な生活習慣について、教師がよく注意をしていることがわかる。

【図表 -3-6】児童・生徒によく注意することがら・児童生徒男女別の選択率（問6）

順位	女子児童・生徒に対して		男子児童・生徒に対して	
1	言葉遣い	69.2%	忘れ物	78.3%
2	友だちと仲良くしなかった時	66.5%	言葉遣い	72.5%
3	忘れ物	58.5%	整理整頓	68.4%
4	子どもたちが頑張らなかった時	58.2%	友だちと仲良くしなかった時	66.2%
5	清潔・身だしなみ	48.1%	子どもたちが頑張らなかった時	63.5%
6	食べ方・座り方などの行儀	44.4%	食べ方・座り方などの行儀	58.2%
7	整理整頓	40.9%	清潔・身だしなみ	56.7%
8	帰宅時間	37.6%	帰宅時間	33.5%
9	泣いた時	26.9%	泣いた時	23.3%
10	家の手伝い	15.2%	家の手伝い	14.7%
11	無回答	3.9%	無回答	2.7%
12	当てはまるものはない	1.5%	当てはまるものはない	0.9%

n=665

3.2.2. 注意することがらの数と教師の性別の関係

児童・生徒の性別によって教師がよく注意することがらに違いがあるかどうかを、注意する点それぞれの回答率の男女別の順位の相関係数をとることによって調べた。スピアマンの順位相関係数は 0.865 と非常に高く、注意する点が児童・生徒の性別によって大きく異なるとは言えないようである。

次に、よく注意することがらとされたことがらの数を教師ごとにみてみた（図表 -3-7、図表 -3-8）。教師がいくつかの点について注意しているかは、注意する児童・生徒の性別によって大きく異なっている。教師は全体として、男子児童・生徒に対して、より多くのことがらについて注意を行なっている。「当てはまるものはない」に○を付けたものを除いて、問6で○が付けられた数は、女子児童・生徒に対しては1教師あたり4.65個であるのに対して、男子児童・生徒に対しては1教師あたり5.35個である。対応のあるサンプルについての t 検定をおこなったところ、児童・生徒の男女間に 1%水準で有意な差があることが確認できた。

【図表 -3-7】 女子児童・生徒に
対して注意することがらの合計

○の数	度数	パーセント
0	36	5.4%
1	46	6.9%
2	79	11.9%
3	95	14.3%
4	88	13.2%
5	93	14.0%
6	51	7.7%
7	54	8.1%
8	42	6.3%
9	41	6.2%
10	40	6.0%
合計	665	100.0%

平均値 4.65
最頻値 3

【図表 -3-8】 男子児童・生徒に
対して注意することがらの合計

○の数	度数	パーセント
0	24	3.6%
1	21	3.2%
2	46	6.9%
3	82	12.3%
4	78	11.7%
5	103	15.5%
6	87	13.1%
7	74	11.1%
8	58	8.7%
9	50	7.5%
10	42	6.3%
合計	665	100.0%

平均値 5.35
最頻値 5

【図表 -3-9】 女子児童・生徒に対して、よく注意することがら（校種別・男女別％）

	小学校教師			中学校教師		
	男性 n=108	女性 n=217	合計 n=325	男性 n=176	女性 n=135	合計 n=311
(1) 忘れ物	50.0%	57.1%	54.8%	59.7%	66.7%	62.7%
(2) 言葉遣い	62.0%	72.8%	69.2%	68.8%	72.6%	70.4%
(3) 清潔・身だしなみ	25.0%	34.6%	31.4%	63.6%	68.1%	65.6%
(4) 整理整頓	31.5%	47.9%	42.5%	36.4%	43.7%	39.5%
(5) 家の手伝い	9.3%	19.4%	16.0%	14.8%	15.6%	15.1%
(6) 食べ方・座り方などの行儀	38.0%	53.9%	48.6%	39.8%	44.4%	41.8%
(7) 帰宅時間	27.8%	35.5%	32.9%	48.9%	34.8%	42.8%
(8) 子どもたちが頑張らなかった時	59.3%	60.8%	60.3%	59.7%	54.8%	57.6%
(9) 友だちと仲良くしなかった時	63.9%	77.4%	72.9%	63.6%	57.0%	60.8%
(10) 泣いた時	18.5%	29.5%	25.8%	27.8%	28.1%	28.0%
(11) 当てはまるものはない	2.8%	1.4%	1.8%	1.7%	0.7%	1.3%

【図表 -3-10】 男子児童・生徒に対して、よく注意することがら（校種別・男女別％）

	小学校教師			中学校教師		
	男性 n=108	女性 n=217	合計 n=325	男性 n=176	女性 n=135	合計 n=311
(1) 忘れ物	66.7%	77.4%	73.8%	85.8%	82.2%	84.2%
(2) 言葉遣い	63.0%	81.1%	75.1%	72.2%	70.4%	71.4%
(3) 清潔・身だしなみ	37.0%	46.1%	43.1%	70.5%	74.1%	72.0%
(4) 整理整頓	64.8%	76.5%	72.6%	64.8%	63.7%	64.3%
(5) 家の手伝い	10.2%	18.0%	15.4%	14.8%	14.8%	14.8%
(6) 食べ方・座り方などの行儀	56.5%	71.4%	66.5%	48.3%	53.3%	50.5%
(7) 帰宅時間	25.0%	33.6%	30.8%	39.8%	34.1%	37.3%
(8) 子どもたちが頑張らなかった時	58.3%	69.1%	65.5%	65.9%	58.5%	62.7%
(9) 友だちと仲良くしなかった時	64.8%	79.7%	74.8%	62.5%	54.1%	58.8%
(10) 泣いた時	19.4%	27.6%	24.9%	21.0%	22.2%	21.5%
(11) 当てはまるものはない	0.9%	0.9%	0.9%	1.1%	0.7%	1.0%

3.2.3. 注意することがらの数と教師の性別・校種の関係

最後に、1 教師が児童・生徒によく注意することがらの総数は、教師の性別や校種によっ

て異なるのかどうかを調べたのが、図表 -3-11 である。教師の性別と校種を独立変数として投入した一般線型モデルを推定した。

女子児童・生徒に対してよく注意することがらの総数を従属変数としたモデルでは、教師の性別、校種の主効果、両者の交互作用のすべての変数が 5%水準で有意であった。すなわち、女子児童・生徒に対しては、男性教師より女性教師の方が、また小学校教師より中学校教師の方が注意することがらの数が多い。また、教師の性別と校種の間には交互作用効果が存在しており、その結果、中学校においては教師の性別による差があまりないのに対して、小学校では教師の性別により注意することがらの数に大きな差がある。

つぎに、男子児童・生徒に対してよく注意することがらの総数を従属変数としたモデルでは、主効果では教師の性別は 5%水準で有意であったが、校種は有意でなかった。教師の性別と校種の交互作用は、5%水準で有意であった。中学校では教師の性別によってよく注意することがらの総数に顕著な差はみられなかったが、小学校では女性教師が男性教師より多くのことがらについて注意をおこなっているという違いがある。

以上の結果から、児童・生徒によく注意することがらの総数という点からみた教師 - 児童・生徒関係におけるジェンダー・バイアスについては、児童・生徒の性別という要因はジェンダー効果をもっていない、中学校では教師の性別という要因は効果を持っていないが、小学校では教師の性別により差があり、女性教師の方が男性教師よりも、より多くのことがらに対して注意を行なっていることがわかった。小学校では教師の指導態度に性差が存在することが示唆されている。

【図表 -3-11】注意することがら・一般線型モデル

従属変数: 女子児童・生徒に対して○をつけた数

	F 値	有意確率
修正モデル	4.164	0.006
切片	1714.718	0
教師性別	5.75	0.017
校種	4.533	0.034
教師性別*校種	5.128	0.024

R2乗 = .019 (調整済みR2乗 = .015)

従属変数: 男子児童・生徒に対して○をつけた数

	F 値	有意確率
修正モデル	5.141	0.002
切片	2620.161	0
教師性別	5.473	0.02
校種	0.409	0.523
教師性別*校種	10.312	0.001

R2乗 = .024 (調整済みR2乗 = .019)

3.3. 注意することがらの内容と教師の性別・校種の関係

あることがらについて、たとえば男子児童・生徒には注意するが、女子児童・生徒には

注意しないといったことがある。図表 -3-12 は、そのような児童・生徒のジェンダーに基づく反応の差異を注意することがらごとに集計したものである。

まず、ことがらごとに、児童・生徒の性別で注意する／しないの差があるかどうかをみてみよう。あることがらについて、女子児童・生徒に対してよく注意すると答えた割合が、男子児童・生徒に対してよく注意すると答えた割合よりも多いものは、「言葉遣い」についての中学校女性教師、「家の手伝い」についての小学校女性教師・中学校女性教師、「帰宅時間」、「頑張らなかったとき」についての小学校男性教師、「泣いたとき」についての小学校女性教師・中学校教師、である。「泣いたとき」についての中学校教師についてのみは、男子生徒と女子生徒の差が 5 ポイントを超えているが、その他は数ポイントの差しかない。他方、多くのことがらについては、男子生徒によく注意する教師の割合が女子生徒によく注意する教師の割合よりも大きく、そのポイント差も大きい。男子生徒は多くの点で注意の対象とされていることがわかる。

つぎに、男子児童・生徒には注意するが女子児童・生徒には注意しない、もしくは、その逆の組み合わせといった、児童・生徒の性別によって非対称な注意の仕方をしている部分（図表 -3-12 中の網がけ部分）に注目した分析を行う。

まず、多くのことがらにおいて、男子には注意するが女子には注意しないという教師の数は、女子には注意するが男子には注意しないという教師の数より多くなっている。これは、注意するか否かの判断が、児童・生徒の性別によって、一定程度、影響を受けていることを意味する。ジェンダー差が存在することがらにおいては、女子注意・男子非注意とする教師の数は非常に少ないが、男子注意・女子非注意とする教師の数は全体の 2 ～ 3 割前後を占めている場合が多い。(1)忘れ物、(3)清潔・身だしなみ、(4)整理整頓、(6)食べ方・座り方、(9)友だちと仲良くしなかった時、がこれに当る。逆に、女子には注意するが男子には注意しないという教師の数が、その逆の組み合わせ（女性非注意・男子注意）より多いケースには、(7)帰宅時間と(10)泣いた時、が含まれる。この二つに(2)言葉遣いを加えた項目が、女子には注意するが男子には注意しないとする教師の割合が、目立って多い項目である。対人関係に関する規範を遵守させようとする力は、女子児童・生徒に対してより強く働いているのかもしれない。

しかし、こうした児童・生徒の性別によって注意したりしなかったりする教師は、少数派である（図表 -3-13）。約半数（48.1%）の教師は、各項目について、「男子のみ、もしくは女子のみに対してよく注意する」というジェンダー・バイアスのある指導をまったく行っていない。また、1つか2つの項目についてのみ、そのような指導を行っていると回答した教師の割合は 29.7%である。ここから大雑把に考えれば、約 8 割の教師については、指導にあたってジェンダー・バイアスが強く働いているような状況にはないと言えるであろう。

【図表 -3-12】 児童・生徒指導におけるジェンダー・バイアス（校種別・男女別）

問6(1) 忘れ物

学校種	教師			男子に対して		合計
				しない	よく注意	
小学校	男 性	女子に対して	注意しない	34 31.5%	20 18.5%	54 50.0%
			よく注意	2 1.9%	52 48.1%	54 50.0%
		合計		36 33.3%	72 66.7%	108 100.0%
	女 性	女子に対して	注意しない	48 22.1%	45 20.7%	93 42.9%
			よく注意	1 0.5%	123 56.7%	124 57.1%
		合計		49 22.6%	168 77.4%	217 100.0%
中学校	男 性	女子に対して	注意しない	25 14.2%	46 26.1%	71 40.3%
			よく注意	0 0.0%	105 59.7%	105 59.7%
		合計		25 14.2%	151 85.8%	176 100.0%
	女 性	女子に対して	注意しない	23 17.0%	22 16.3%	45 33.3%
			よく注意	1 0.7%	89 65.9%	90 66.7%
		合計		24 17.8%	111 82.2%	135 100.0%

問6(2) 言葉遣い

学校種	教師			男子に対して		合計
				しない	よく注意	
小学校	男 性	女子に対して	注意しない	32 29.6%	9 8.3%	41 38.0%
			よく注意	8 7.4%	59 54.6%	67 62.0%
		合計		40 37.0%	68 63.0%	108 100.0%
	女 性	女子に対して	注意しない	27 12.4%	32 14.7%	59 27.2%
			よく注意	14 6.5%	144 66.4%	158 72.8%
		合計		41 18.9%	176 81.1%	217 100.0%
中学校	男 性	女子に対して	注意しない	37 21.0%	18 10.2%	55 31.3%
			よく注意	12 6.8%	109 61.9%	121 68.8%
		合計		49 27.8%	127 72.2%	176 100.0%
	女 性	女子に対して	注意しない	28 20.7%	9 6.7%	37 27.4%
			よく注意	12 8.9%	86 63.7%	98 72.6%
		合計		40 29.6%	95 70.4%	135 100.0%

問6(3) 清潔・身だしなみ

学校種	教師			男子に対して		合計
				しない	よく注意	
小学校	男 性	女子に対して	注意しない	67 62.0%	14 13.0%	81 75.0%
			よく注意	1 0.9%	26 24.1%	27 25.0%
		合計		68 63.0%	40 37.0%	108 100.0%
	女 性	女子に対して	注意しない	115 53.0%	27 12.4%	142 65.4%
			よく注意	2 0.9%	73 33.6%	75 34.6%
		合計		117 53.9%	100 46.1%	217 100.0%
中学校	男 性	女子に対して	注意しない	41 23.3%	23 13.1%	64 36.4%
			よく注意	11 6.3%	101 57.4%	112 63.6%
		合計		52 29.5%	124 70.5%	176 100.0%
	女 性	女子に対して	注意しない	29 21.5%	14 10.4%	43 31.9%
			よく注意	6 4.4%	86 63.7%	92 68.1%
		合計		35 25.9%	100 74.1%	135 100.0%

問6(4) 整理整頓

学校種	教師			男子に対して		合計
				しない	よく注意	
小学校	男 性	女子に対して	注意しない	37 34.3%	37 34.3%	74 68.5%
			よく注意	1 0.9%	33 30.6%	34 31.5%
		合計		38 35.2%	70 64.8%	108 100.0%
	女 性	女子に対して	注意しない	50 23.0%	63 29.0%	113 52.1%
			よく注意	1 0.5%	103 47.5%	104 47.9%
		合計		51 23.5%	166 76.5%	217 100.0%
中学校	男 性	女子に対して	注意しない	59 33.5%	53 30.1%	112 63.6%
			よく注意	3 1.7%	61 34.7%	64 36.4%
		合計		62 35.2%	114 64.8%	176 100.0%
	女 性	女子に対して	注意しない	45 33.3%	31 23.0%	76 56.3%
			よく注意	4 3.0%	55 40.7%	59 43.7%
		合計		49 36.3%	86 63.7%	135 100.0%

問6(5) 家の手伝い

学校種	教師			男子に対して		合計
				しない	よく注意	
小学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	97 89.8%	1 0.9%	98 90.7%
			よく 注意	0 0.0%	10 9.3%	10 9.3%
		合計		97 89.8%	11 10.2%	108 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	175 80.6%	0 0.0%	175 80.6%
			よく 注意	3 1.4%	39 18.0%	42 19.4%
		合計		178 82.0%	39 18.0%	217 100.0%
中学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	148 84.1%	2 1.1%	150 85.2%
			よく 注意	2 1.1%	24 13.6%	26 14.8%
		合計		150 85.2%	26 14.8%	176 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	114 84.4%	0 0.0%	114 84.4%
			よく 注意	1 0.7%	20 14.8%	21 15.6%
		合計		115 85.2%	20 14.8%	135 100.0%

問6(6) 食べ方・座り方

学校種	教師			男子に対して		合計
				しない	よく注意	
小学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	47 43.5%	20 18.5%	67 62.0%
			よく 注意	0 0.0%	41 38.0%	41 38.0%
		合計		47 43.5%	61 56.5%	108 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	59 27.2%	41 18.9%	100 46.1%
			よく 注意	3 1.4%	114 52.5%	117 53.9%
		合計		62 28.6%	155 71.4%	217 100.0%
中学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	90 51.1%	16 9.1%	106 60.2%
			よく 注意	1 0.6%	69 39.2%	70 39.8%
		合計		91 51.7%	85 48.3%	176 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	58 43.0%	17 12.6%	75 55.6%
			よく 注意	5 3.7%	55 40.7%	60 44.4%
		合計		63 46.7%	72 53.3%	135 100.0%

問6(7) 帰宅時間

学校種	教師			男子に対して		合計
				しない	よく注意	
小学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	75 69.4%	3 2.8%	78 72.2%
			よく 注意	6 5.6%	24 22.2%	30 27.8%
		合計		81 75.0%	27 25.0%	108 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	134 61.8%	6 2.8%	140 64.5%
			よく 注意	10 4.6%	67 30.9%	77 35.5%
		合計		144 66.4%	73 33.6%	217 100.0%
中学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	87 49.4%	3 1.7%	90 51.1%
			よく 注意	19 10.8%	67 38.1%	86 48.9%
		合計		106 60.2%	70 39.8%	176 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	86 63.7%	2 1.5%	88 65.2%
			よく 注意	3 2.2%	44 32.6%	47 34.8%
		合計		89 65.9%	46 34.1%	135 100.0%

問6(8) 子どもたちが頑張らなかった時

学校種	教師			男子に対して		合計
				しない	よく注意	
小学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	41 38.0%	3 2.8%	44 40.7%
			よく 注意	4 3.7%	60 55.6%	64 59.3%
		合計		45 41.7%	63 58.3%	108 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	67 30.9%	18 8.3%	85 39.2%
			よく 注意	0 0.0%	132 60.8%	132 60.8%
		合計		67 30.9%	150 69.1%	217 100.0%
中学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	60 34.1%	11 6.3%	71 40.3%
			よく 注意	0 0.0%	105 59.7%	105 59.7%
		合計		60 34.1%	116 65.9%	176 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	54 40.0%	7 5.2%	61 45.2%
			よく 注意	2 1.5%	72 53.3%	74 54.8%
		合計		56 41.5%	79 58.5%	135 100.0%

問6(9) 友だちと仲良くしなかった時

学校種	教師			男子に対して		合計
				しない	よく注意	
小学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	34 31.5%	20 18.5%	54 50.0%
			よく 注意	2 1.9%	52 48.1%	54 50.0%
		合計		36 33.3%	72 66.7%	108 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	48 22.1%	45 20.7%	93 42.9%
			よく 注意	1 0.5%	123 56.7%	124 57.1%
		合計		49 22.6%	168 77.4%	217 100.0%
中学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	25 14.2%	46 26.1%	71 40.3%
			よく 注意	0 0.0%	105 59.7%	105 59.7%
		合計		25 14.2%	151 85.8%	176 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	23 17.0%	22 16.3%	45 33.3%
			よく 注意	1 0.7%	89 65.9%	90 66.7%
		合計		24 17.8%	111 82.2%	135 100.0%

問6(10) 泣いた時

学校種	教師			男子に対して		合計
				しない	よく注意	
小学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	75.9%	6 5.6%	88 81.5%
			よく 注意	5 4.6%	15 13.9%	20 18.5%
		合計		87 80.6%	21 19.4%	108 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	148 68.2%	5 2.3%	153 70.5%
			よく 注意	9 4.1%	55 25.3%	64 29.5%
		合計		157 72.4%	60 27.6%	217 100.0%
中学校	男 性	女子に 対して	注意 しない	125 71.0%	2 1.1%	127 72.2%
			よく 注意	14 8.0%	35 19.9%	49 27.8%
		合計		139 79.0%	37 21.0%	176 100.0%
	女 性	女子に 対して	注意 しない	96 71.1%	1 0.7%	97 71.9%
			よく 注意	9 6.7%	29 21.5%	38 28.1%
		合計		105 77.8%	30 22.2%	135 100.0%

【図表 -3-13】 男子だけ、もしくは女子だけによく注意すること
ことがら(問6)の合計数別の教員数

ことがらの 合計数	教員数	パ-セント	累積パ-セント
0	320	48.1	48.1
1	100	15.0	63.2
2	98	14.7	77.9
3	61	9.2	87.1
4	39	5.9	92.9
5	28	4.2	97.1
6	12	1.8	98.9
7	5	.8	99.7
8	1	.2	99.8
9	1	.2	100.0
合計	665	100.0	

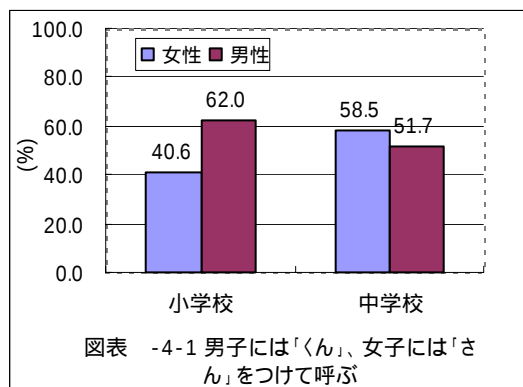
4．教師からみた生徒の姿

4.1. 生徒への日常的な接し方（問7）

日常の教育・指導において、教師は生徒にどのように接しているのだろうか。男女を意識的に区別しているのか、あるいは性別を意識しないようにしているのか、5つの質問を設けて尋ねた。

呼称

まず、生徒に対してどのような呼称を使用しているのか、「男子には『くん』、女子には



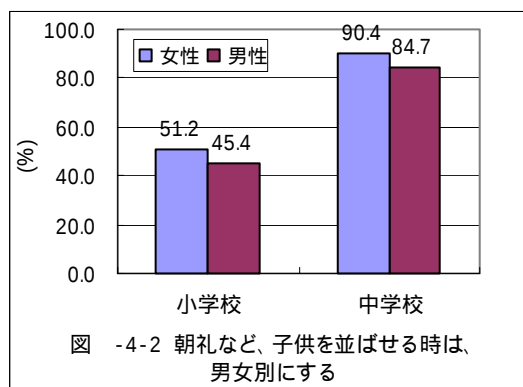
『さん』をつけて呼ぶ」ことが該当するか否かを尋ねた。すると、小学校でも中学校でも、教師の半数前後が性別で異なる呼称を使用していた。

これをさらに性別でみると（図表 -4-1）小学校では、男性教師の方が女性教師より、性別で異なった呼び方をすると答えた比率が高かった。一方中学校では、逆に女性教師の方が

男性教師より、呼び方を変えている者が多かったが、統計的には有意な差ではなかった。

ただし、男女で同じ呼称を用いているのかどうか、呼び捨てにしているのかなど、「くん」「さん」の男女呼び分け以外については今回の質問では、不明である。

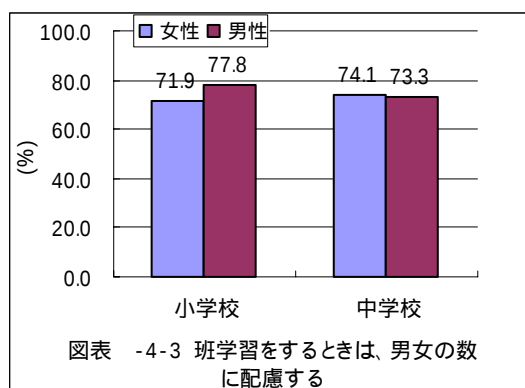
整列時



次に、整列時について「朝礼など、子どもを並ばせるときは、男女別にする」かどうかを尋ねたところ、小学校から中学校にかけて該当とする比率が高くなることがわかった。男女別に整列させる小学校は半数程度であるが、中学校になると、86%と男女別整列が圧倒的である。教師の性別によってはほとんど違いはみられなかった（図表 -4-2）。

班分け

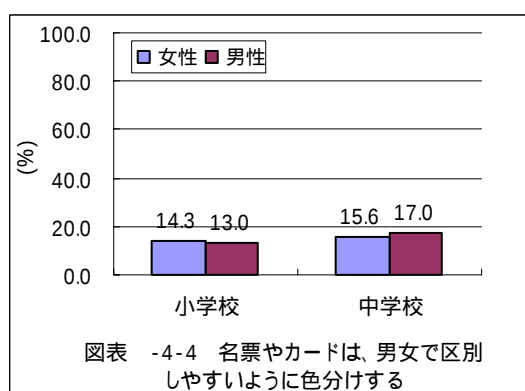
さらに、「班別学習をするときは、男女の数に配慮する」かどうかを尋ねた。小グループでの学習活動においては、ジェンダーバイアスに敏感に対応しようとする、単に男子のみ、女子のみの班構成を避けるということ以外にも、理科の実験などで男子が主導権を握りやすいような場面であえて男女別に班分けをするというような実践もありうる。そうし



たことから、「男女別」にするかどうかを問うことをやめ、「男女の数に配慮する」というふうになぜしている。

その結果、「配慮する」という回答は小学校でも中学校でも約4分の3に達し、教師の性別によってもほぼ違いはみられなかった(図表-4-3)。

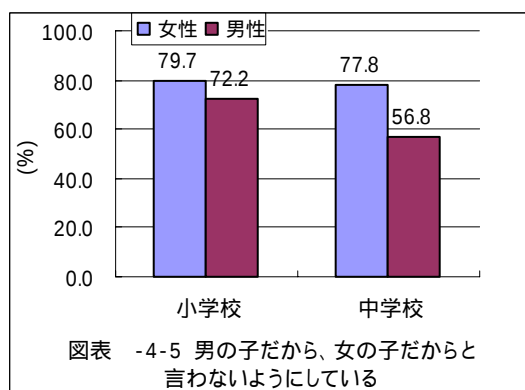
色分け



男女を区別しようとする際のもっとも特徴的な行為として、男子にブルーを、女子にピンクという色を割り当てるといふものがある。そこで、「名票やカードは、男女で区別しやすいように色分けする」かどうかを尋ねたところ、あてはまるとする回答は、小学校でも中学校でも15%程度であった。教師の性別によっても回答の違いはほとんどみられなかった(図表

-4-4)。

「男の子だから / 女の子だから」



最後に、直接的な発言として「男の子だから、女の子だからと言わないようにしている」かどうかを尋ねたところ、中学校よりも小学校で、そうした発言をしないように意識されていることが示された。これを教師の性別にみても、男性よりも女性教師がそのように意識していることがうかがえた。中学校の男性教師でそのように意識する比率が最も低く、小学校の男

性教師(72.2%)の回答より15ポイントも低かった(56.8%)(図表 -4-5)。

【図表 -4-6】生徒への日常的な接し方（校種・男女別％）

	小学校				中学校			
	女性 217人	男性 108人	合計 325人	χ^2	女性 135人	男性 176人	合計 311人	χ^2
男子には「くん」女子には「さん」 をつけて呼ぶ	40.6	62.0	47.7	***	58.5	51.7	54.7	n.s.
朝礼等、子供を並ばせる時は、 男女別にする	51.2	45.4	49.2	n.s.	90.4	84.7	87.1	n.s.
班学習をするときは、男女の数に 配慮する	71.9	77.8	73.8	n.s.	74.1	73.3	73.6	n.s.
名票やカードは男女で区別し易い 様に色分けする	14.3	13.0	13.8	n.s.	15.6	17.0	16.4	n.s.
男の子だから、女の子だからと言わ ないようにしている	79.7	72.2	77.2	n.s.	77.8	56.8	65.9	***

以上の結果から、全体としては、小学校より中学校のほうで、また女性教師よりも男性教師で、教育活動上性別によって区別がされており、ジェンダーへの配慮が少ないことが示された。

4.2. 教師の生徒に対する態度の自己認識（問8）

次に、教師は、日頃生徒に接する自らの態度が生徒の性別で異なっているかどうかについての程度自覚的であるのかについて、7項目を設定して尋ねた（図表 -4-7）。選択肢としては、「女子の方」「どちらかといえば女子」「男女同じくらい」「どちらかという男子」「男子の方」という5件法で回答を得たが、分析は「女子の方＋どちらかといえば女子」「男女同じくらい」「どちらかといえば男子＋男子の方」という3カテゴリーにまとめた。多くの項目では「男女同じくらい」という回答が大多数を占めたが、中には男女に分かれる項目もみられた。本節では、主として、「男女同じくらい」を除いた残りの回答が男女どちらに偏っているかに着目して結果を記述する。

【図表 -4-7】教師の生徒に対する態度の自己認識（7項目）

1	授業で指名することが多いのは
2	つい、厳しく叱ってしまうのは
3	つい、優しくしてしまうのは
4	休み時間などに話しかけることが多いのは
5	励ますことが多いのは
6	考えていることや気持ちがわかりやすいのは
7	仕事を頼みやすいのは

授業中の指名

授業中の指名は、男女同じくらいとする回答が大多数であるが、それを除いて男子か女子かを比べてみると、男子の方を指名するとする回答がやや多い。その傾向は小学校よりも中学校でより強くなり、中学校男性教師では「女子を多く指名する」1.1%に対して「男子を多く指名する」15.5%とやや多い（図表 -4-8）。

【図表 -4-8】授業で指名することが多いのは（校種・男女別％）

(%)

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	212	1.9	93.9	4.2	n.s.
	男性	105	1.9	90.5	7.6	
	合計	317	1.9	92.7	5.4	
中学校	女性	133	0.0	90.2	9.8	-
	男性	174	1.1	83.3	15.5	
	合計	307	0.7	86.3	13.0	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

つい「厳しく叱る」「優しくする」

教師の「女子に甘く、男子に厳しい」という態度は生徒の間ではよく指摘されるところである。この点を、教師自身はどのように認識しているのだろうか。図表 -4-9と図表 -4-10に示したとおり、小学校の教師も中学校の教師も、男子にはつい厳しく叱り、女子につい優しくしてしまう、と認識しているようだ。とりわけ、男子に対して厳しくするという自己認識が高いといえる。

学校種別・性別により詳しくみると、小学校でも中学校でも、女性教師より男性教師の方が、男子に対して「つい、厳しく叱ってしまう」としている。その比率は男性教師では小学校でも中学校でもあまり差がないが、中学校の女性教師の場合には、男子の方を厳しく叱るという回答は27.1%と、小学校の女性教師よりも10ポイント以上も少なくなっている（図表 -4-9）。

【図表 -4-9】つい「厳しく叱る」のは（校種・男女別％）

(%)

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	210	1.0	57.1	41.9	-
	男性	104	0.0	48.1	51.9	
	合計	314	0.6	54.1	45.2	
中学校	女性	133	1.5	71.4	27.1	-
	男性	173	0.0	46.2	53.8	
	合計	306	0.7	57.2	42.2	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

一方で、優しくするという点については、全体としては男女同じくらいとする回答が多数を占めているが、小学校でも中学校でも、女性教師より男性教師の方が「女子に優しくしてしまう」とする者が多い。さらに、その比率は女性教師では小学校と中学校でほとんど差がないが、中学校の男性教師では38.0%と、小学校の男性教師より15ポイントほど多い(図表 -4-10)。

【図表 -4-10】つい「優しくする」のは(校種・男女別%)

(%)

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	210	18.1	78.1	3.8	-
	男性	103	23.3	76.7	0.0	
	合計	313	19.8	77.6	2.6	
中学校	女性	133	17.3	79.7	3.0	***
	男性	171	38.0	60.8	1.2	
	合計	304	28.9	69.1	2.0	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

以上をまとめると、男子生徒は小学校でも中学校でも男性教師からは女子より厳しく叱られ、女性教師からは、成長するにつれ厳しく叱られることが少なくなる。女子生徒は、小・中学校を通して厳しく叱られることは少なく、中学校になると男性教師から優しくされることが多くなる、ということができる。

励まし

励ましという点ではどうかをみると、全体として男女同じくらいとする回答が多数を占めており、男女どちらかへの偏りは少なかった(図表 -4-11)。

【図表 -4-11】励ますことが多いのは(校種・男女別%)

(%)

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	212	6.1	83.0	10.8	n.s.
	男性	104	2.9	90.4	6.7	
	合計	316	5.1	85.4	9.5	
中学校	女性	134	7.5	88.1	4.5	n.s.
	男性	170	6.5	81.8	11.8	
	合計	304	6.9	84.5	8.6	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

「話しかける」「仕事を頼む」

では、話しかける・仕事を頼むなど、生徒への働きかけについてはどうだろうか。調査

結果からは、中学校の男性教師の男子生徒への働きかけの多さが目についてくる。

「休み時間などに話しかけることが多い」のはどちらかを尋ねたところ、全体としては男女同じくらいとする回答が多くを占めており、小学校では教師の性別による対応の差も大きくない。しかし、中学校では、教師の性別によって話しかける生徒の性別に偏りが見られた。女性教師では小学校と中学校で態度に大きな変化はないが、男性教師では、中学校で男子生徒の方に話しかけるという比率が急増し、2割を超える（図表 -4-12）。

【図表 -4-12】休み時間などに話しかけることが多いのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	211	13.7	82.0	4.3	n.s.
	男性	105	8.6	87.6	3.8	
	合計	316	12.0	83.9	4.1	
中学校	女性	134	11.9	79.1	9.0	**
	男性	173	3.5	75.1	21.4	
	合計	307	7.2	76.9	16.0	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

仕事の頼みやすさについては、全体としては男女同じくらいとしつつ、小学校では男女教師とも、どちらかといえば男子より女子の方に頼みやすいと感じているようだが、中学校では、男性教師の約2割が、男子の方が頼みやすいと答えている（図表 -4-13）。

【図表 -4-13】仕事を頼みやすいのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	211	15.2	78.2	6.6	n.s.
	男性	104	18.3	73.1	8.7	
	合計	315	16.2	76.5	7.3	
中学校	女性	134	8.2	82.1	9.7	**
	男性	172	14.0	64.5	21.5	
	合計	306	11.4	72.2	16.3	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

この両項目に対する調査結果から、中学校の男性教師の、男子生徒への親しみの強さを見てとることができよう。

生徒理解

最後に「考えていることや気持ちがわかりやすいのは」どちらのほうかを尋ねた。その結果を学校種別・性別にみると、小学校・中学校ともに教師の性別によって「気持ちがわ

かりやすい」とする回答に差がみられた。また、小学校から中学校へと学校段階が上がる
と、同性の生徒の気持ちの方がわかりやすいと答える比率が大幅に増える(図表 -4-14)。

これをもう少し詳細にみると、小学校でも中学校でも、男性教師では男子の気持ち
の方がわかりやすいとする回答が過半数に達していた。他の質問項目では「男女同じく
らい」とする回答がおおむね大多数であったが、気持ちの理解という点では「つい厳しく叱っ
てしまう」以上に男子の方が該当するという比率が高かった。

一方女性教師では、最も多いのは小・中学校とも「男女同じくらい」という回答である
が、男子か女子かを比べると、小学校では男子の方の「気持ちがわかりやすい」とする回
答の方が多く、中学校では女子の方の「気持ちがわかりやすい」と逆転する。児童生徒が
成長するにつれ、同性のほうが理解しやすいととらえられる傾向があるといえる。

【図表 -4-14】考えていることや気持ちが分かりやすいのは(校種・男女別%)

(%)

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	210	16.2	60.0	23.8	***,
	男性	104	1.9	43.3	54.8	
	合計	314	11.5	54.5	34.1	
中学校	女性	133	30.8	57.1	12.0	***,
	男性	172	2.9	28.5	68.6	
	合計	305	15.1	41.0	43.9	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

教師の側からの生徒への接し方の認識についてまとめてみると、まず全体としては、生
徒に対して男女同じように接していると認識している教師が多数を占めていた。この点を
ふまえた上で、性別によって接し方が異なる場合の傾向をみると、女性教師は小学校から
中学校にかけて、男子生徒と関係をつくることから手を引いてゆき、逆に男性教師は小学
校から中学校にかけて男子生徒の関係を密にしていく。男性教師は、「優しくする」以外の
項目で、小学校から中学校にかけて、男子生徒への関わりを強めていく。中学校の男性教
師の男子生徒への親密さが際だつ結果といえる。中学校の教師の男女比は、男性教師の割
合が高いことから、その結びつきはより一層強い意味合いを帯びてくるのではないだろう
か。

4.3. 教師からみた生徒の姿(問9): 教室内の生徒の相互作用に対する認識

それでは、教師の目に、自分が授業をしているクラスの子どもたちの姿はどのように映っ
ているのだろうか。12項目を設定して(図表 -4-15) 男女どちらの方にあてはまるかを
尋ねた。

その結果、およそすべての項目で「男女同じくらい」という回答が半数を越えていた

が、それを除いて男女どちらの方に回答が偏っているかに着目して、結果を述べることにする。また選択肢として「女子の方」「どちらかといえば女子」「男女同じくらい」「どちらかという男子」「男子の方」という5段階で回答を得たが、前項と同様に、分析は「女子の方+どちらかといえば女子」「男女同じくらい」「どちらかといえば男子+男子の方」という3カテゴリーにまとめて行なった。

【図表 -4-15】教師からみた生徒の姿（12項目）

1	教室で偉そうにしているのは
2	意見がよく通るのは
3	からかわれるのは
4	リーダーになるのは
5	授業でよく発言するのは
6	教師の手伝いをよくするのは
7	休み時間によく話しかけてくるのは
8	勝ち負けにこだわるのは
9	グループで行動するのは
10	教師の言うことを素直にきくのは
11	反抗的なのは
12	創造性があるのは

4.3.1. 男らしさ/女らしさ項目（ 小学校・中学校ともに、どちらかの性に該当することが多い、と回答された項目）

まず、「 授業でよく発言する」のは、男女どちらかといえば男子の方だととらえられている。男性教師・女性教師ともに同様にとらえているものの、小学校と中学校では相違があり、小学校教師よりも中学校教師のほうが、男子にあてはまるととらえる傾向がみられた（図表 -4-16）。

【図表 -4-16】授業でよく発言するのは（校種・男女別％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ ²
小学校	女性	209	8.6	61.2	30.1	n.s.
	男性	103	11.7	65.0	23.3	
	合計	312	9.6	62.5	27.9	
中学校	女性	132	11.4	49.2	39.4	n.s.
	男性	169	8.9	56.2	34.9	
	合計	301	10.0	53.2	36.9	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

また、教室で「 からかわれる」のも、男女どちらかといえば男子の方だととらえられている。小学校よりも中学校でその比率が高く、小学校では男女教師とも3分の1程度であるが、中学校では男女とも過半数が男子の方にあてはまると回答している（図表

-4-17)。

【図表 -4-17】からかわれるのは(校種・男女別%)

(%)

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	193	2.6	61.7	35.8	n.s.
	男性	96	8.3	60.4	31.3	
	合計	289	4.5	61.2	34.3	
中学校	女性	130	0.0	46.9	53.1	-
	男性	168	3.0	40.5	56.5	
	合計	298	1.7	43.3	55.0	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

以上の2項目から、教室の中で目立っているのは男子であることがうかがえる。またその傾向も、小学校から中学校へと、年齢が高くなるにつれて、よりはっきりと示されている。

「勝ち負けにこだわる」のも、どちらかといえば男子の方ととらえられている(図表-4-18)。とくに、小学校では「勝ち負けにこだわるのは男子の方」とする回答が男性・女性教師ともに6割近くに達し、こうした見方は男女共通の認識といえる。中学校でも、どちらかといえば男子の方とする回答が多いのだが、「男女同じくらい」あるいは「女子に該当」とする回答が男女教師ともに増えてくることは注目される。この点については、教師の性別によってはそれほど大きな認識の違いはみられなかった。

【図表 -4-18】勝ち負けにこだわるのは(校種・男女別%)

(%)

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	209	3.3	39.7	56.9	n.s.
	男性	99	2.0	39.4	58.6	
	合計	308	2.9	39.6	57.5	
中学校	女性	131	13.7	67.2	19.1	n.s.
	男性	166	13.3	59.6	27.1	
	合計	297	13.5	63.0	23.6	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

このほか、「創造性がある」のも、男子の方が若干あてはまるととらえられる傾向がある。ただしこの偏りは上記3項目ほど顕著ではなく、学校種別や性別によるとらえ方の差も大きくなかった。そのなかで、女性教師において、小学校教師の方が「男子の方に創造性がある」とより多く回答し、中学校の女性教師では女子・男子のとらえ方が平準化し差がみられなくなるという違いがみられた(図表-4-19)。

【図表 -4-19】創造性があるのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	208	8.7	65.9	25.5	n.s.
	男性	102	14.7	65.7	19.6	
	合計	310	10.6	65.8	23.5	
中学校	女性	130	12.3	73.1	14.6	n.s.
	男性	168	11.9	70.2	17.9	
	合計	298	12.1	71.5	16.4	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

一方、女子の方があてはまるととらえられる傾向があるのは、「グループで行動する」「教師の手伝いをよくする」「休み時間によく話しかけてくる」であった。

とはいえ、女子が男子以上に教師の手伝いをしたり、休み時間によく話しかけてきたりしていると教師がとらえる比率は、中学校ではやや低くなる。男子の方とする比率と比べれば、中学校でも女子の方とする比率の方が高いものの、小学校から中学校にかけて、女子の方とする比率はやや少なくなり、男子の方とする回答が増加する（図表 -4-20、図表 -4-21）。男子のほうに仕事を頼みやすくなりよく話しかけるようになるという、教師の側からの生徒に対する態度の、小学校から中学校への変化とも対応しているといえる（前項 4.2 参照）。

【図表 -4-20】教師の手伝いをよくするのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	208	28.4	66.8	4.8	n.s.
	男性	101	30.7	63.4	5.9	
	合計	309	29.1	65.7	5.2	
中学校	女性	132	25.0	64.4	10.6	n.s.
	男性	168	23.2	61.9	14.9	
	合計	300	24.0	63.0	13.0	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

【図表 -4-21】休み時間によく話し掛けてくるのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	208	36.5	60.6	2.9	n.s.
	男性	102	32.4	61.8	5.9	
	合計	310	35.2	61.0	3.9	
中学校	女性	134	23.1	64.9	11.9	n.s.
	男性	169	23.7	59.2	17.2	
	合計	303	23.4	61.7	14.9	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

女子にあてはまるという回答が多かった、もう一つの項目「グループで行動する」については、男女教師とも圧倒的に男子よりも女子のほうにあてはまるとし、小学校よりも中学校でその比率が高くなる。なかでも、中学校の男性教師で「女子の方」とする回答は6割と群を抜いている（図表 -4-22）。

【図表 -4-22】グループで行動するのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	206	35.0	60.2	4.9	n.s.
	男性	103	37.9	60.2	1.9	
	合計	309	35.9	60.2	3.9	
中学校	女性	133	51.9	44.4	3.8	n.s.
	男性	168	61.3	36.9	1.8	
	合計	301	57.1	40.2	2.7	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

4.3.2. 教室の中の生徒間の権力関係に関する項目

「教室でえらそうにしている」「よく意見が通る」については、教室において男女どちらが主導権を握っているのか、生徒間の権力関係を教師がどのようにとらえているのかを示す項目である。

その結果、「教室でえらそうにしている」については教師の学校種別・性別によってあまり差がみられず、女子か男子かといった性別によってどちらかに偏った受けとり方もほとんどされていなかった（図表 -4-23）。

【図表 -4-23】教室で偉そうにしているのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	202	15.3	67.8	16.8	n.s.
	男性	99	22.2	58.6	19.2	
	合計	301	17.6	64.8	17.6	
中学校	女性	130	23.8	58.5	17.7	n.s.
	男性	167	18.0	62.9	19.2	
	合計	297	20.5	60.9	18.5	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

次いで「よく意見が通る」については、中学校の男性教師のみが、どちらかといえば女子とする比率が 28.4%と高かったが、そのほかの小学校の男女教師・中学校の女性教師ともに、女子の方・男子の方とする比率はいずれも 15%前後であり、生徒の性別によってどちらかに偏った受け取り方は少なかった（図表 -4-24）。

【図表 -4-24】意見がよく通るのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	205	16.1	68.3	15.6	n.s.
	男性	102	17.6	67.6	14.7	
	合計	307	16.6	68.1	15.3	
中学校	女性	130	18.5	67.7	13.8	n.s.
	男性	169	28.4	55.6	16.0	
	合計	299	24.1	60.9	15.1	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

「長」がつく役割は男子、「副」がつく役割は女子と、「リーダーになる」のは、伝統的には男子生徒であったのだろうが、近年では学校での役割には変化がみられるようである。「リーダーになる」のはどちらかといえば女子の方だとする回答が、男子の方とする回答よりやや多くみられた。男子の方との回答は小・中、男女教師ともに 2 割弱であり、女子の方とするのは、（小学校の女性教師を除いた）小学校男性教師、中学校男女教師で 3 割前後であった（図表 -4-25）。

【図表 -4-25】リーダーになるのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	206	21.8	58.7	19.4	n.s.
	男性	102	28.4	52.9	18.6	
	合計	308	24.0	56.8	19.2	
中学校	女性	133	30.1	54.1	15.8	n.s.
	男性	168	33.3	47.0	19.6	
	合計	301	31.9	50.2	17.9	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

4.3.3. 教師 - 生徒関係に関する項目

最後に、「教師の言うことを素直に聞く」と「反抗的」の2項目を取り上げる。

「教師の言うことを素直に聞く」については、中学校の男性教師のみ「男子の方」とする回答が2割を超え、男子の方に回答がやや偏っている。小学校男性教師と小・中学校女性教師では、男女どちらにもさほどの偏りはみられなかった（図表 -4-26）。

【図表 -4-26】教師の言うことを素直に聞くのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	209	14.8	78.0	7.2	n.s.
	男性	102	9.8	78.4	11.8	
	合計	311	13.2	78.1	8.7	
中学校	女性	132	9.8	80.3	9.8	*
	男性	166	9.6	68.7	21.7	
	合計	298	9.7	73.8	16.4	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

では「反抗的」なのはどちらかととらえられているだろうか。図表 -4-27 に示したとおり、小学校では男性・女性教師とも、女子よりも男子の方が反抗的であるととらえている。中学校では、女性教師は男子の方が反抗的であるととらえているのに対して、男性教師はむしろ女子の方が反抗的であるととらえている。これは、女性教師のとらえ方が、小学校でも中学校でもほぼ一定であるのに対して、男性教師のとらえ方が変化しているためである。

【図表 -4-27】反抗的なのは（校種・男女別％）

（％）

		人数	女子	男女同じ	男子	χ^2
小学校	女性	197	9.1	68.0	22.8	n.s.
	男性	98	12.2	66.3	21.4	
	合計	295	10.2	67.5	22.4	
中学校	女性	128	7.8	71.1	21.1	*
	男性	164	18.3	66.5	15.2	
	合計	292	13.7	68.5	17.8	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

4.3.4. 性別によって異なる教師の目からみた児童・生徒の姿

教師の目から見た児童・生徒の姿は、自らの児童・生徒に対する態度以上に、児童・生徒の性別によって異なったものとして映っている。このことから、教師は、児童・生徒の性別による行動特性の違いを感じているにもかかわらず、児童・生徒には性別によらず同じ態度で接している、ということもできよう。

調査結果からは、発言したりからかわれたり、教室で目立つのは男子であるものの、意見が通ったりリーダーになったりするのには男女同等か、むしろ女子の方であり、いまや教室の主導権は女子が握っていると、教師が受けとっていることがわかる。小学生の頃は、教師の手伝いをしたり慕って話しかけてきたりしていた女子も、中学生になるとグループで行動するようになると教師は受けとっており、とりわけ男性教師にとっては反抗的な態度を示してくるよう映っている。

また、児童・生徒の性別による教師の側の態度や受け取り方の違いは、男性教師は女性教師以上に小学校と中学校との間で差が大きいように思われる。教師の性別比は、中学校では男性の方が多くを占めており、教師と児童・生徒の関係の持ち方や児童・生徒の受け取り方について男性教師のとらえ方が支配的な力を持ちうると考えられる。小学校から中学校へと学校段階があがるにつれて、学校環境は児童・生徒にとってより強くジェンダー化されていくことができるだろう。

しかしながら、全体的には男女の違いを感じていないものが多数を占めていることには注目しておかなければならない。この結果は、教師の多くがジェンダーのとらわれから自由であることを示しているのか、それとも性別によらず個々の児童・生徒の特徴としてとらえようとするあまりジェンダー・ブラインドとなっていることを示しているのか。一方で、性別による行動特性の違いを認めている者は、ジェンダー・バイアスに敏感であるがゆえに感じ取られているのか、それともステレオタイプによるものなのか。状況はそれほど単純ではないように思われる。

５．管理主義とジェンダー

5.1. 教育観（問１０）

10 項目の教育観についてどう思うかを「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう
思わない」「全くそう思わない」4 件法で尋ねた。男女別の回答結果が図表 -5-1 に示され
ている。

【図表 -5-1】教育観（男女別％）

		人数	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	X ²
(1)学級の決まりがゆるむと、 学級全体の規律がなくなるの で、教師は毅然とした態度が 必要である	女性	349	47.6	47.9	4.6		n.s.
	男性	279	41.9	50.9	7.2		
	合計	628	45.1	49.2	5.7		
(2)教師はその指示により、 学級の児童に規律ある行動を させる必要がある	女性	346	37.9	55.2	6.9		n.s.
	男性	279	35.8	57.0	7.2		
	合計	625	37.0	56.0	7.0		
(3)教師は学校教育に携わる ものとして、同僚と同一歩調を とることが必要である	女性	348	26.4	60.9	12.4	0.3	n.s.
	男性	278	32.0	56.8	10.4	0.7	
	合計	626	28.9	59.1	11.5	0.5	
(4)児童は担任教師の指導を 素直に聞く態度が必要である	女性	343	35.3	58.3	6.4	-	n.s.
	男性	279	30.8	60.9	8.2	-	
	合計	622	33.3	59.5	7.2	-	
(5)教師は児童のあやまちに は、一貫した毅然たる指導を する必要がある	女性	345	47.2	45.2	7.5	-	*
	男性	277	39.7	46.9	12.3	1.1	
	合計	622	43.9	46.0	9.6	0.5	
(6)教師と児童は、親しい中に も毅然たる一線を保つべきで ある	女性	348	56.0	39.9	4.0	-	n.s.
	男性	280	48.2	47.1	4.3	0.4	
	合計	628	52.5	43.2	4.1	0.2	
(7)児童の教育・生活指導には ある程度の厳しさが必要であ る	女性	344	49.4	47.7	2.9	-	*
	男性	280	43.9	49.3	6.8	-	
	合計	624	47.0	48.4	4.6	-	
(8)学級経営は学級集団全体 の向上が基本である	女性	346	50.6	43.6	5.8	0.0	n.s.
	男性	279	42.7	48.7	8.2	0.4	
	合計	625	47.0	45.9	6.9	0.2	
(9)児童は、授業中に、 挙手の仕方・発言の仕方など 規律のある態度が必要である	女性	345	22.3	60.3	17.4	-	n.s.
	男性	278	16.5	60.8	22.7	-	
	合計	623	19.7	60.5	19.7	-	
(10)児童が学校・学級のきまり を守る努力をすることは、 社会性の育成につながる	女性	348	55.5	42.2	2.0	0.3	n.s.
	男性	279	45.9	50.2	3.9	-	
	合計	627	51.2	45.8	2.9	0.2	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

男女の教師の意識の差を見ると、有意差があった項目は、「(5)教師は児童のあやまちに
は、一貫した毅然たる指導をする必要がある」「(7)児童の教育・生活指導にはある程度の

厳しさが必要である」の2項目で、他は特に有為な差がなかった。すなわち、8項目においては、どの質問についても、ほとんどの教師が「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答し、その合計は8～9割に達していた。このことは、教師は、児童・生徒に毅然とした態度や規律ある行動を期待し、教師同士や児童・生徒同士の集団でのまとまりを重視する傾向にあったことを示している。

5%水準で男女差があった「(5)教師は児童のあやまちには、一貫した毅然たる指導をする必要がある」では「とてもそう思う」が男性教師で40%、女性教師で47%と、女性の方が毅然たる指導を特に支持しており、また「(7)児童の教育・生活指導にはある程度の厳しさが必要である」でも、「とてもそう思う」が男性教師で44%、女性教師で49%と、女性の方が厳しい指導を支持しており、女性教師の方が指導において厳格性を特に支持していたことは注目に値する。女性教師からの厳しい指導を児童・生徒は拒否的に対応する可能性が高いと推測されるが、そのことの裏替えしとして、女性教師は児童生徒に毅然とした態度を取る必要があると思う傾向にあるとも推測される。

校種別の結果を図表 -5-2 に示した。校種別で有意差があった項目は、「(3)教師は学校教育に携わるものとして、同僚と同一歩調をとることが必要である」「(9)児童は、授業中に、挙手の仕方・発言の仕方など規律のある態度が必要である」の2項目で、いずれも0.1%水準で有意差が示されていた。

【図表 -5-2】教育観（校種別％）

		人数	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	χ ²
(3)教師は学校教育に携わるものとして、同僚と同一歩調をとることが必要である	小学校	332	21.7	61.4	16.6	0.3	***
	中学校	318	36.5	56.9	6.0	0.6	
	合計	650	28.9	59.2	11.4	0.5	
(9)児童は、授業中に、挙手の仕方・発言の仕方など規律のある態度が必要である	小学校	331	24.8	58.3	16.9	-	***
	中学校	316	13.9	63.3	22.8	-	
	合計	647	19.5	60.7	19.8	-	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

「(3)教師は学校教育に携わるものとして、同僚と同一歩調をとることが必要である」の質問項目では、「とてもそう思う」と回答した教師の割合は、小学校で21.7%、中学校で36.5%と、中学校の方がその割合は高く、中学校の教師の方が、教師集団の同一歩調を重視していることが明らかとなった。小学校ではクラス担任制で、そのクラスの児童の生活指導は一人の教師が一貫して担当することが多いが、中学校では教科担任制なので、複数の教師がそれぞれの場面で生活指導にあたることが多く、教師同士が同一歩調をとらないと、生徒指導が上手くいかない場面が多いことを反映した意識であると思われる。

「(9)児童は、授業中に、挙手の仕方・発言の仕方など規律のある態度が必要である」の質問項目は、「とてもそう思う」と回答した教師の割合は、小学校で 24.8%、中学校で 13.9%と、(3)の項目とは逆に小学校の方がその割合は高く、小学校の教師の方が、子どもに規律ある態度を求めている。児童に集団生活における社会性を身につけさせていくことが、小学校段階の教育内容の主要な部分を占めていることを考慮すると、子どもの規律を常にその視野に入れている教師の姿勢が反映していると考えられる。

地域別の結果を図表 -5-3 に示した。地域別で有為な差があった質問項目は、「(3)教師は学校教育に携わるものとして、同僚と同一歩調をとることが必要である」「(5)教師は児童のあやまちには、一貫した毅然たる指導をする必要がある」の 2 項目であった。

「(3)教師は学校教育に携わるものとして、同僚と同一歩調をとることが必要である」の質問項目では、「とてもそう思う」と回答した教師の割合は、福島で 35.3%、会津で 30.6%、国分寺で 20.9%、相模原で 28.9%と、福島県の方が東京及びその近郊よりその割合は高く、福島県の教師の方が、教師集団の同一歩調を重視していることが明らかとなった。

「(5)教師は児童のあやまちには、一貫した毅然たる指導をする必要がある」の質問項目では、「とてもそう思う」と回答した教師の割合は、福島で 45.8%、会津で 38.8%、国分寺で 41.1%、相模原で 46.3%と、会津が他の地域よりその割合は低く、会津の教師は他の地域と比較して毅然とした指導をそれほど重視していないことが明らかとなった。

【図表 -5-3】教育観（地域別％）

		人数	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	χ^2
(3)教師は学校教育に携わる ものとして、同僚と同一歩調を とることが必要である	福島	167	35.3	56.3	8.4	-	**
	会津	121	30.6	59.5	9.1	0.8	
	国分寺	158	20.9	68.4	9.5	1.3	
	相模原	204	28.9	54.4	16.7	-	
	合計	650	28.9	59.2	11.4	0.5	
(5)教師は児童のあやまちに は、一貫した毅然たる指導を する必要がある	福島	166	45.8	48.2	6.0	-	*
	会津	121	38.8	51.2	9.9	-	
	国分寺	158	41.1	40.5	17.1	1.3	
	相模原	201	46.3	45.3	8.0	0.5	
	合計	646	43.5	46.0	10.1	0.5	

全 10 項目の回答を因子分析したところ、1 因子が検出された ($KMO = 0.902$)。そこで、「とてもそう思う」を 4 点、「少しそう思う」を 3 点、「あまりそう思わない」を 2 点、「全くそう思わない」を 1 点として尺度得点を求め、10 項目の合計値を管理主義尺度として、校種別男女別に集計したところ、図表 -5-4 のようになった。

校種別では小学校合計の管理主義尺度の平均値は 33.47、中学校合計のそれは 33.16 で、小学校の方が管理主義尺度は多少高い傾向にあったが、統計的に有意な差ではなかった。

小学校の教師に限定して男女別にみると、男性の管理主義尺度の平均値は 32.51、女性のそれは 33.95 と、女性の方が管理主義尺度の平均値は高く、1%水準で有意な差が示された。中学校の教師の男女別をみると、男性の管理主義尺度の平均値は 33.10、女性のそれは 33.25 と、女性の方が管理主義尺度の平均値は高かったが、有意な差ではなかった。小学校と中学校を合計した男女別では、男性の管理主義尺度の平均値は 32.88、女性のそれは 33.68 と、女性の方が管理主義尺度の平均値は高く、5%水準で有意な差があった。

同様に 4 地区別で管理主義尺度を比較したところ、地区別では有為な差がなかった。

すなわち、管理主義尺度の平均値は、女性の方が男性より高い傾向にあり、特に小学校の教師にその傾向が強かった。

【図表 -5-4】管理主義尺度（校種・男女別％）

		人数	平均値
小学校	女 性	202	33.95
	男 性	100	32.51
	合 計	302	33.47
中学校	女 性	128	33.25
	男 性	167	33.10
	合 計	295	33.16
合 計	女 性	330	33.68
	男 性	267	32.88
	合 計	597	33.32

5.2. 教育において重要な分野（問 1 1）

これからの教育において重要と考える分野、「(1)情報」「(2)国際理解」「(3)環境教育」「(4)ジェンダー」「(5)キャリア教育」「(6)性教育」「(7)食育」の 7 分野に関して、「とても重要である」「やや重要である」「それほど重要でない」の 3 件法で回答してもらった結果を男女別に示したのが、図表 -5-5 である。

全体の傾向としては、「とても重要である」と回答した割合が 6 割を超えている分野は、「(3)環境教育」「(7)食育」の 2 つであり、これらの分野は教師が重要と考えている分野であることが分かった。逆に「とても重要である」と回答した割合が 3 割を下回っている分野は「(4)ジェンダー」「(5)キャリア教育」の分野であり、これらはあまり重要視されていなかった。ただし、これらの分野でも「とても重要である」「やや重要である」を合計した割合は 7 割を超えており、一定の割合で、重要であると考えられていることが明らかとなった。

男女別で有意な差があった項目は「(2)国際理解」「(3)環境教育」「(4)ジェンダー」「(6)性教育」「(7)食育」の 5 分野にわたっていた。また、男女差のあった 5 分野のうちすべての分野で、女性の方がその分野の教育が重要であると回答していた。

すなわち「(2)国際理解」の分野で「とても重要である」と回答した割合は、男性で 49.6%、女性で 51.3%と、女性の方がその割合は高く、5%水準の有意差が示され、女性の方が「(2)国際理解」が重要であると考えていた。「(3)環境教育」の分野でも、「とても重要である」と回答した割合は、男性で 60.3%、女性で 67.2%と、1%水準で女性の方がその割合は高かった。

【図表 -5-5】教育において重要な分野（男女別％）

		人数	とても重要である	やや重要である	それほど重要ではない	χ^2
(1)情報	女性	344	43.9	52.6	3.5	ns
	男性	281	51.2	44.8	3.9	
	合計	625	47.2	49.1	3.7	
(2)国際理解	女性	347	51.3	47.3	1.4	*
	男性	278	49.6	44.6	5.8	
	合計	625	50.6	46.1	3.4	
(3)環境教育	女性	344	67.2	32.8	0.0	**
	男性	277	60.3	37.5	2.2	
	合計	621	64.1	34.9	1.0	
(4)ジェンダー	女性	342	27.5	63.5	9.1	***
	男性	277	15.5	59.9	24.5	
	合計	619	22.1	61.9	16.0	
(5)キャリア教育	女性	335	23.0	54.3	22.7	ns
	男性	278	24.5	54.0	21.6	
	合計	613	23.7	54.2	22.2	
(6)性教育	女性	345	49.6	48.4	2.0	***
	男性	280	37.9	55.0	7.1	
	合計	625	44.3	51.4	4.3	
(7)食育	女性	348	69.3	27.9	2.9	***
	男性	281	49.5	44.5	6.0	
	合計	629	60.4	35.3	4.3	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

「(4)ジェンダー」「(6)性教育」「(7)食育」の3分野はとりわけ男女の差が大きく、「(4)ジェンダー」の分野が「とても重要である」と回答した割合は、男性で 15.5%、女性で 27.5%と女性の方が 12 ポイントも高く、0.1%水準で女性の方がその分野の教育が重要であると考えていた。「(6)性教育」の分野で「とても重要である」と回答した割合は、男性で 37.9%、女性で 49.6%と、女性の方が 12 ポイント高く、「(7)食育」の分野でも「とても重要である」と回答した割合は、男性で 49.5%、女性で 69.3%と、女性の方が 20 ポイント高く、0.1%水準で有意な差があった。すなわちこの3つの分野では特に女性の方が男性よりも、その分野の教育が重要であると考えている教師が多いことが明らかとなった。

次に校種別に集計し、校種別で有意な差があった項目を、図表 -5-6 に示した。

校種別で有意差があった項目は「(4)ジェンダー」「(5)キャリア教育」「(6)性教育」「(7)食育」の4分野であった。そのうち、小学校の教師の方が中学校の教師より「とても重要

である」と回答した割合が高い項目は、「(4)ジェンダー」「(7)食育」であり、逆に中学校の教師の方が小学校の教師より「とても重要である」と回答した割合が高い項目は「(5)キャリア教育」「(6)性教育」であった。

すなわち「(4)ジェンダー」の分野で「とても重要である」と回答した割合は、小学校教師で 26.0%、中学校教師で 18.8%と、小学校教師の方がその割合は高く、1%水準で有意差が示され、小学校教師の方が「(4)ジェンダー」が重要であると考えていた。また、「(7)食育」の分野でも、「とても重要である」と回答した割合は、小学校教師で 64.9%、中学校教師で 55.7%と、5%水準で有意差が示され、小学校教師の方がその割合は高かった。

一方、「(5)キャリア教育」の分野で「とても重要である」と回答した割合は、小学校教師で 19.1%、中学校教師で 28.1%と、中学校教師の方がその割合は高く、5%水準で有意差が示され、中学校教師の方が「(5)キャリア教育」が重要であると考えていた。また、「(6)性教育」の分野でも、「とても重要である」と回答した割合は、小学校教師で 41.3%、中学校教師で 46.3%と、1%水準で中学校教師の方がその割合は高かった。

「(4)ジェンダー」「(7)食育」といった、日常生活習慣と不可欠な分野では、小学校の教師の方が重要と考えており、「(5)キャリア教育」「(6)性教育」といった将来設計や思春期の問題などに関する分野では中学校の教師の方が重要と考えており、対象児童生徒の発達段階と深く関わっているといえよう。

【図表 -5-6】教育において重要な分野（校種別％）

		人数	とても重要である	やや重要である	それほど重要ではない	χ^2
(4)ジェンダー	小学校	327	26.0	62.4	11.6	**
	中学校	309	18.8	60.8	20.4	
	合計	636	22.5	61.6	15.9	
(5)キャリア教育	小学校	320	19.1	57.8	23.1	*
	中学校	310	28.1	50.6	21.3	
	合計	630	23.5	54.3	22.2	
(6)性教育	小学校	329	41.3	56.2	2.4	**
	中学校	313	46.3	47.3	6.4	
	合計	642	43.8	51.9	4.4	
(7)食育	小学校	333	64.9	32.1	3.0	*
	中学校	314	55.7	38.9	5.4	
	合計	647	60.4	35.4	4.2	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

教育において重要な分野を地区別に集計し、有意差がある項目だけを示したのが、図表-5-7である。

地区別で有意な差があった分野は、「(1)情報」「(5)キャリア教育」「(6)性教育」「(7)食育」であった。また、地区別の差のあった4分野のうちすべての分野で、「福島」「会津」の方が「国分寺」「相模原」より、その分野の教育が重要であると回答していた。

例えば、「(1)情報」では、「とても重要である」と回答した教師の割合は、福島で 49.7%、会津で 48.3%、国分寺で 47.5%、相模原で 44.5%と、福島県の方が東京及びその近郊よりその割合は高く、逆に「それほど重要でない」と回答した教師の割合は、福島で 0.0%、会津で 2.5%、国分寺で 7.5%、相模原で 5.0%と、東京及びその近郊の方が福島県よりその割合は高く、福島県の教師の方が、重要であると考えている傾向にあり、5%水準で有意な差があった。以下同様に、「(5)キャリア教育」「(6)性教育」「(7)食育」においても、「とても重要である」と回答した教師の割合は福島県の方が東京及びその近郊よりその割合は高く、逆に「それほど重要でない」と回答した教師の割合は東京及びその近郊の方が福島県よりその割合は高く、それぞれ 0.1%、1%、1%の水準で有意な差があった。

【図表 -5-7】教育において重要な分野（地域別％）

		人数	とても重要である	やや重要である	それほど重要ではない	χ ²
(1)情 報	福島	163	49.7	50.3	-	*
	会津	120	48.3	49.2	2.5	
	国分寺	160	47.5	45.0	7.5	
	相模原	200	44.5	50.5	5.0	
	合計	643	47.3	48.8	3.9	
(5)キャリア教育	福島	163	27.6	57.7	14.7	***
	会津	120	33.3	49.2	17.5	
	国分寺	152	21.1	55.3	23.7	
	相模原	195	15.9	53.8	30.3	
	合計	630	23.5	54.3	22.2	
(6)性教育	福島	164	47.6	47.0	5.5	**
	会津	120	57.5	42.5	-	
	国分寺	156	36.5	58.3	5.1	
	相模原	202	38.1	56.4	5.4	
	合計	642	43.8	51.9	4.4	
(7)食 育	福島	164	68.9	30.5	0.6	**
	会津	120	65.8	31.7	2.5	
	国分寺	160	54.4	40.6	5.0	
	相模原	203	55.2	37.4	7.4	
	合計	647	60.4	35.4	4.2	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

新たな分野や注目されているトピックス的な分野に対して、東京及びその近郊より福島県の教師の方が重要であると考えている傾向にあり、東京の方がそうした先進的な分野に敏感であるとの予想とは反対の結果であった。福島県の教師の方が、新たな時代を先取りしようという意欲が強い傾向にあったといえよう。

5.3. ジェンダー特性（問 1 2）

ジェンダーの特性に関する 10 項目についてどう思うかを「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」4 件法で尋ねた。その回答の男女別の

結果を図表 -5-8 に示した。

【図表 -5-8】ジェンダー特性（男女別％）

		人数	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	χ^2
問12(1)能力や適性は 男女で異なる	女 性	348	10.3	58.6	24.7	6.3	***
	男 性	278	23.7	54.7	16.9	4.7	
	合 計	626	16.3	56.9	21.2	5.6	
問12(2)男女のちがいを 認めあい、補いあうことが大切 だ	女 性	348	61.8	34.8	3.4	-	ns
	男 性	280	62.9	35.7	1.4	-	
	合 計	628	62.3	35.2	2.5	-	
問12(3)女らしさ、男らしさを 否定すべきではない	女 性	342	28.4	57.3	12.3	2.0	**
	男 性	278	39.9	47.5	11.2	1.4	
	合 計	620	33.5	52.9	11.8	1.8	
問12(4)男女は生物学的に 異なるのだから、 何でも平等というのはおかしい	女 性	343	25.7	51.9	17.2	5.2	ns
	男 性	279	28.3	48.7	19.7	3.2	
	合 計	622	26.8	50.5	18.3	4.3	
問12(5)男の子は男らしく、 女の子は女らしく育てることは 大切である	女 性	343	5.5	38.8	47.5	8.2	***
	男 性	280	13.6	51.4	30.4	4.6	
	合 計	623	9.1	44.5	39.8	6.6	
問12(6)女性の人生において、 妻であり母であることも 大事だが、仕事をするとも それと同じくらい重要である	女 性	347	41.5	50.1	7.8	0.6	***
	男 性	280	23.9	62.9	13.2	0.0	
	合 計	627	33.7	55.8	10.2	0.3	
問12(7)子どもが小さいうちは、 母親は家にいた方がよい	女 性	346	13.0	50.0	28.0	9.0	***
	男 性	277	23.1	56.3	17.0	3.6	
	合 計	623	17.5	52.8	23.1	6.6	
問12(8)経済的に不自由でな ければ、女性は働かなくてもよい	女 性	347	1.7	8.1	54.2	36.0	***
	男 性	276	5.8	22.1	56.9	15.2	
	合 計	623	3.5	14.3	55.4	26.8	
問12(9)女性は家事や育児を しなければならないから、 あまり責任の重い、競争の激 しい仕事をしない方がよい	女 性	346	0.9	11.0	53.5	34.7	***
	男 性	277	3.2	15.5	61.7	19.5	
	合 計	623	1.9	13.0	57.1	27.9	
問12(10)女性の校長・教頭を もっと増やした方がよい	女 性	334	15.6	31.1	49.1	4.2	***
	男 性	274	4.0	32.5	53.3	10.2	
	合 計	608	10.4	31.7	51.0	6.9	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

男女の教師の意識の差を見ると、「(2)男女の違いを認め合い、補い合うことが大切だ」「(4)男女は生物学的に異なるのだから、何でも平等というのはおかしい」の2項目を除いて、他の8項目すべてにおいて有意な差が認められた。そのなかで、女性の方が「とてもそう思う」と回答した割合が高い質問項目は、「(6)女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするともそれと同じくらい重要である」(0.1%水準で有意差)「(10)女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい」(0.1%水準で有意差)という2項目

であり、他の6項目はすべて、男性の方が「とてもそう思う」と回答した割合が高かった。その6項目とは、「(1)能力や適性は男女で異なる」(0.1%水準で有意差)「(3) 女らしさ、男らしさを否定すべきではない」(1%水準で有意差)「(5)男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることは大切である」(0.1%水準で有意差)「(7)子どもが小さいうちは、母親は家にいた方がよい」(0.1%水準で有意差)「(8)経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい」(0.1%水準で有意差)「(9)女性は家事や育児をしなければならぬから、あまり責任の重い、競争の激しい仕事をしない方がよい」(0.1%水準で有意差)である。すなわち、女性の社会進出を肯定し、男女平等を志向する2項目は女性が肯定する割合が高く、男女差を認め、性別役割を肯定する質問項目については男性が肯定する割合が高かった。

ジェンダー特性についてどう思うかの回答の、校種別で集計した結果を図表 -5-9 に示した。

校種別で有意差があった質問項目は「(2)男女の違いを認め合い補い合うことが大切だ」「(3) 女らしさ、男らしさを否定すべきではない」「(5)男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることは大切である」の3項目であった。そのうち、小学校の教師の方が中学校の教師より「とても重要である」と回答した割合が高い項目は、「(2)男女の違いを認め合い補い合うことが大切だ」であり、逆に中学校の教師の方が小学校の教師より「とても重要である」と回答した割合が高い項目は「(5)男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることは大切である」であった。

【図表 -5-9】ジェンダー特性(校種別%)

		人数	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	χ ²
問12(2)男女のちがいを 認めあい、補いあうことが 大切だ	小学校	331	62.5	33.5	3.9	-	*
	中学校	314	61.1	37.9	1.0	-	
	合計	645	61.9	35.7	2.5	-	
問12(3)女らしさ、男らしさを 否定すべきではない	小学校	325	28.9	53.5	15.1	2.5	**
	中学校	311	37.6	52.7	8.7	1.0	
	合計	636	33.2	53.1	11.9	1.7	
問12(5)男の子は男らしく、 女の子は女らしく育てることは 大切である	小学校	327	5.2	40.7	45.0	9.2	***
	中学校	310	12.9	49.0	33.9	4.2	
	合計	637	8.9	44.7	39.6	6.8	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

「(2)男女の違いを認め合い補い合うことが大切だ」では、「とてもそう思う」と回答した割合は、小学校教師で62.5%、中学校教師で61.1%と、小学校教師の方がその割合が多少高く、5%水準の有意差で小学校教師の方が肯定的であった。それとは逆に、「(3) 女らしさ、男らしさを否定すべきではない」では、「とてもそう思う」と回答した割合は、小学

校教師で 28.9%、中学校教師で 37.6%と、「(5)男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることは大切である」では、「とてもそう思う」と回答した割合は、小学校教師で 5.2%、中学校教師で 12.9%と、それぞれ 1%、0.1%水準の有意差で中学校教師の方が肯定的に捉えていた。

すなわち、中学校教師の方が男女の相違を肯定的に捉える傾向が強いことが明らかとなった。これは、対象生徒が第 2 次性徴によって性の相違が明確になり、小学校よりは常に性別を意識して生活指導を行わなければならない中学校の学校文化が、教師が生徒を性で区別して捉える傾向を促す結果と考えられる。

ジェンダー特性についてどう思うかの回答を地域別で集計した結果を図表 -5-10 に示した。

【図表 -5-10】ジェンダー特性（地域別％）

		人数	とても そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	χ ²
問12(1)能力や適性は 男女で異なる	福島	161	19.3	64.0	14.3	2.5	**
	会津	120	20.0	55.0	23.3	1.7	
	国分寺	158	15.8	49.4	25.3	9.5	
	相模原	203	11.3	58.1	23.6	6.9	
	合計	642	16.0	56.9	21.7	5.5	
問12(3)女らしさ、男らしさを 否定すべきではない	福島	162	40.1	54.9	4.3	0.6	***
	会津	120	39.2	47.5	13.3	0.0	
	国分寺	155	32.3	55.5	8.4	3.9	
	相模原	199	24.6	53.3	20.1	2.0	
	合計	636	33.2	53.1	11.9	1.7	
問12(5)男の子は男らしく、 女の子は女らしく育てることは 大切である	福島	163	9.8	55.2	31.3	3.7	***
	会津	119	15.1	46.2	37.0	1.7	
	国分寺	156	10.3	37.2	41.7	10.9	
	相模原	199	3.5	41.2	46.2	9.0	
	合計	637	8.9	44.7	39.6	6.8	
問12(8)経済的に不自由でな ければ、女性は働かなくてもよ い	福島	162	3.1	18.5	59.3	19.1	*
	会津	120	2.5	14.2	60.8	22.5	
	国分寺	154	2.6	9.7	57.8	29.9	
	相模原	203	4.9	15.8	46.8	32.5	
	合計	639	3.4	14.7	55.2	26.6	
問12(10)女性の校長・教頭を もっと増やした方がよい	福島	159	10.7	28.9	54.1	6.3	***
	会津	118	5.1	27.1	62.7	5.1	
	国分寺	146	8.2	25.3	53.4	13.0	
	相模原	200	14.0	42.0	40.0	4.0	
	合計	623	10.1	31.9	51.0	6.9	

地域別で有意な差があった質問項目は、「(1)能力や適性は男女で異なる」（1%水準で有意差）「(3) 女らしさ、男らしさを否定すべきではない」（0.1%水準で有意差）「(5)

男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることは大切である」(0.1%水準で有意差)「(8)経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい」(1%水準で有意差)「(10)女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい」(0.1%水準で有意差)の5項目であった。また、地区別の差のあったこの5分野のうちの4項目で、「福島」「会津」の方が「国分寺」「相模原」より、肯定的に捉える傾向にあった。

例えば、「(3)女らしさ、男らしさを否定すべきではない」では、「とてもそう思う」と回答した教師の割合は、福島で19.3%、会津で20.0%、国分寺で15.8%、相模原で11.3%と、福島県の方が東京及びその近郊より、肯定的に回答した教師の割合は高く、0.1%水準で有意な差があった。また、「(5)男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることは大切である」においては、「とてもそう思う」との回答の割合に一定の傾向がなかったが、「あまりそう思わない」と回答した教師の割合は、福島で31.3%、会津で37.0%、国分寺で41.7%、相模原で46.3%と、東京及びその近郊の方が福島県より、否定的に回答した教師の割合は高く、0.1%水準で有意な差があった。すなわち、福島県の方が東京及びその近郊よりも、ジェンダーの特性を区別して捉える傾向にあるといえよう。

なお、「(10)女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい」の質問項目では、必ずしも、福島県が否定的で東京及びその近郊が肯定的とは言えなかった。すなわち、「とてもそう思う」と肯定的に回答した教師の割合は、福島で10.7%、会津で5.1%、国分寺で8.2%、相模原で14.0%と、福島と相模原でその割合が高く、「あまりそう思わない」と否定的に回答した教師の割合は、会津で62.7%と他と比べて高く、相模原で40.0%と他と比べて低く、「全くそう思わない」と回答した教師の割合は国分寺で13.0%と他と比べて高く、0.1%水準で有意な差があった。これらを総合すると福島と相模原で肯定的に捉える教師が多く、国分寺と会津で否定的に捉える教師の割合が高い結果であった。その背景については、校長の女性割合や、生徒指導や学校管理運営のしくみや慣習の相違など、さらに詳細な検討が必要であろう。

次にジェンダー特性の10項目について「とてもそう思う」に1、「少しそう思う」に2、「あまりそう思わない」に3、「全くそう思わない」に4を与えて因子分析を行った。ただし、女性の社会進出を肯定し、男女平等を志向する2項目「問12逆(6)女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である」と「問12逆(10)女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい」は、他の項目と逆の傾向を示しているため、「とてもそう思う」に4、「少しそう思う」に3、「あまりそう思わない」に2、「全くそう思わない」に1を与えた。因子分析(バリマックス回転)の結果、図表-5-11に示したように、3因子が検出された($KMO = 0.750$)。

第1因子は「問12(3)女らしさ、男らしさを否定すべきではない」「問12(5)男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることは大切である」など男女の違いを確認する項目であることから「男女差因子」と名付けた。第2の因子は「問12(8)経済的に不自由でなければ、

女性は働かなくてもよい」「問 12(9)女性は家事や育児をしなければならないから、あまり責任の重い、競争の激しい仕事をしない方がよい」など性別役割に関する項目であることから「性別役割因子」と名付けた。第3の因子は「問 12(10)女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい」の1項目であったので、特に因子得点を付与しての分析は行わないこととした。

(1)(2)(3)(4)(5)の得点の合計値を「男女差因子」得点とした。「男女差因子」得点の最大値は 20 点である。(6)(7)(8)(9)の得点の合計値を「性役割因子」得点とした。「性役割因子」得点の最大値は 16 点である。

【図表 -5-11】ジェンダー尺度の回転後の因子行列

	第1因子	第2因子	第3因子
問12(3)女らしさ、男らしさを否定すべきではない	0.793	0.103	0.135
問12(5)男の子は男らしく、女の子は女らしく 育てることは大切である	0.513	0.276	0.032
問12(4)男女は生物学的に異なるのだから、 何でも平等というのはおかしい	0.493	0.078	-0.048
問12(2)男女のちがいを認めあい、補いあうことが大切だ	0.489	-0.096	0.071
問12(1)能力や適性は男女で異なる	0.473	0.125	-0.113
問12(8)経済的に不自由でなければ、 女性は働かなくてもよい	0.093	0.811	-0.029
問12(9)女性は家事や育児をしなければならないから、 あまり責任の重い、競争の激しい仕事をしない方がよい	0.145	0.672	0.182
問12逆(6)女性の人生において、妻であり母であることも 大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である	-0.051	0.507	0.273
問12(7)子どもが小さいうちは、母親は家にいた方がよい	0.364	0.461	0.036
問12逆(10)女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい	0.021	0.188	0.686

図表 -5-12 に、学校種別男女別「男女差因子尺度」「性役割因子尺度」の平均値を示した。

「男女差因子尺度」の男性の平均値は 15.63、女性のそれは 14.84 で、男性の方が 0.1% 水準で有意に高く、男性の方が男女差を肯定する傾向にあった。学校種別にみると、小学校の教師の平均値は 14.82、中学校の教師の平均値は 15.58 と中学校の方が 0.1% 水準で有意に高く、中学校の教師の方が男女差を肯定する傾向にあった。学校種毎の男女別では、小学校においては男性の方が平均値は高いが有意な差はなかった。中学校では男性の方が女性より高く、1% 水準で有意な差があった。

「性役割因子尺度」の男性の平均値は 9.09、女性のそれは 7.87 で、男性の方が 1%水準で有意に高く、男性の方が性役割を肯定する傾向にあった。学校種別にみると、小学校の教師の平均値は 8.33、中学校の教師の平均値は 8.51 と中学校の方が 0.1%水準で有意に高く、中学校の教師の方が性別役割を肯定する傾向にあった。学校種毎の男女別では、小学校においても中学校においても男性の平均値が女性より高く、0.1%水準で有意な差があった。

すなわち、これらジェンダー特性を示す 2 つの因子とも、男性の方が、また、中学校の教師の方が肯定する傾向にあった。

【図表 -5-12】校種別男女別「男女差因子尺度」「性役割因子尺度」の平均値

		男女差因子尺度			性役割因子尺度			
		人数	平均値	有意差	人数	平均値	有意差	
小学校	女 性	207	14.67	n.s.	211	7.91	***	***
	男 性	102	15.13		104	9.17		
	合計	309	14.82		315	8.33		
中学校	女 性	128	15.12	**	132	7.82	***	***
	男 性	173	15.92		170	9.05		
	合計	301	15.58		302	8.51		
合計	女 性	335	14.84	***	343	7.87	***	***
	男 性	275	15.63		274	9.09		
	合計	610	15.20		617	8.42		

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

【図表 -5-13】男女別地域別「男女差因子尺度」「性役割因子尺度」の平均値

		男女差因子尺度			性役割因子尺度		
		人数	平均値	有意差	人数	平均値	有意差
男 性	福島	59	16.00	*	60	9.50	n.s.
	会津	58	16.26		58	9.07	
	国分寺	77	15.40		74	8.70	
	相模原	81	15.11		82	9.17	
	合計	275	15.63		274	9.09	
女 性	福島	97	15.66	***	98	8.16	n.s.
	会津	57	14.89		58	8.17	
	国分寺	73	14.36		74	7.69	
	相模原	108	14.41		113	7.59	
	合計	335	14.84		343	7.87	
合計	福島	156	15.79	***	158	8.67	n.s.
	会津	115	15.58		116	8.62	
	国分寺	150	14.89		148	8.20	
	相模原	189	14.71		195	8.26	
	合計	610	15.20		617	8.42	

男女別地区別「男女差因子尺度」「性役割因子尺度」の平均値を図表 -5-13 に示した。

地区別でみると、「男女差因子尺度」は、男女合計では、福島は 15.79、会津は 15.58、国分寺は 14.89、相模原は 14.71 と、福島県の方が東京及びその近郊と比べて尺度平均値が 0.1%水準で有意に高く、男女差を肯定する傾向にあった。

男性のみでみた場合も 5%水準で、女性のみでみた場合も 0.1%水準で、福島県の方が東京及びその近郊より尺度平均値が有意に高く、男女差を肯定する傾向にあった。ただし、「性役割因子尺度」を地区別でみたときは、合計においても、男性においても女性においても、尺度平均値は、福島県の方が東京及びその近郊より高い傾向もみられるが、有意な差はなかった。すなわち、これらジェンダー特性を示す 2 つの因子において、男女差を肯定する傾向は福島県の方が強かったが、性役割を肯定する傾向に相違はなかった。

5.3. 女性が職業を持って働くことについて（問 13）

女性が職業を持ってはたらくことについて、あなたの考えに近いものを 1 つ選んで○をつけてもらった結果は図表 -5-14 に示されている。男性も女性も「結婚しても子どもができて、職業を続ける」と回答した教師の割合が最も高く、男性で 42.1%、女性で 73.3% の教師がこの選択肢を選んでいて、男性でも 4 割を超えるものがこの項目を選んでおり、学校の教師は多くの職業の中で、女性割合が高い職業であり、また共働きの教師も多い。そうした実態が、男女共に、共働きを続けることを肯定する傾向にあらわれているものと思われる。なお、男女で比較すると、女性の方が男性より 30 ポイントほど高くなっており、男女で大きく異なっていた。

【図表 -5-14】女性が職業を持って働くことについて（男女別%）

	人数	結婚しても子どもができて、 職業を続ける	子供ができたなら仕事を辞め、 子供が大きくなったら また職業を持つ	結婚しても、子供ができるまで は職業をもつ	結婚したら仕事をやめる	女性は一生職業を持たない	わからない	χ^2
女 性	347	73.8	14.1	4.0	0.3	0.0	7.8	n.s.
男 性	273	42.1	34.4	4.0	1.5	0.4	17.6	
合計	620	59.8	23.1	4.0	0.8	0.2	12.1	

次に多かった回答は「子供ができたなら仕事を辞め、子供が大きくなったらまた職業を持

つ」という選択肢で、男性で 34.4%、女性で 14.1%と、男性の方がこの選択肢を選んだ割合が高かった。「結婚しても、子供ができるまでは職業をもつ」「結婚したら仕事をやめる」という専業主婦指向を選んだ者はほとんどおらず、教師の世界では専業主婦指向は非常に少ない価値観になっていることが明らかとなった。

「結婚しても子どもができて、職業を続ける」は女性の社会進出を肯定し、「子供ができたら仕事を辞め、子供が大きくなったらまた職業を持つ」はそれを否定する選択肢であるが、前者は女性に支持され、後者は男性に指示される傾向から、女性の方が女性の社会進出を指示し、男性の方がそれを否定する傾向にあった。

なお、校種別、地域別においては有意な差が見られなかったので、ここでは省略する。